

えどはくカルチャー「多摩文学歴史散歩（全3回）」の記録

行 吉 正 一*

田 中 実 穂**

目 次

はじめに

1. 多摩文学歴史散歩について

2. 多摩文学歴史散歩の記録

(1) 小泉八雲の「雪おんな」の青梅を歩く

①小泉八雲「雪おんな」について

②物語の舞台を訪ねて

③散歩の行程

(2) 療養所の町と文学 - 東京療養所・清瀬病院、多磨全生園 -

①石田波郷

②吉行淳之介

③北条民雄

④物語の舞台を訪ねて

⑤散歩の行程

(3) 大岡昇平『武蔵野夫人』の小金井を歩く

①大岡昇平

②『武蔵野夫人』

③物語の舞台を訪ねて

④散歩の行程

おわりに

多摩文学歴史散歩地図

キーワード 文学散歩 多摩 小泉八雲 雪女 結核 東京療養所 石田波郷 清瀬病院
吉行淳之介 ハンセン病 多磨全生園 北条民雄 小金井 はげ 大岡昇平
武蔵野夫人

*元東京都江戸東京博物館学芸員

**東京都江戸東京博物館学芸員

はじめに

本稿は、「えどはくカルチャー」で行った講座「多摩文学歴史散歩」(全3回)(2010年度、2011年度、2013年度)の実施報告である。この講座は、東京都の多摩地域¹⁾を舞台とした文学作品をとりあげ、文学作品を鑑賞するとともに、作品の舞台となった多摩地域を実際に歩き、その地域の歴史・地理を学ぶというものである。

講座は、各回、2日間で1講座とし、1日目を座学による講義、2日目を実際に現地を歩く散歩という構成とした。1日目に、文学作品および舞台となった地域の学習を行い、2日目に、実際にその地域を、学んだことを確認しながら歩くという講座である。講座は、文学についての内容を行吉正一が、地域の歴史・地理に関する内容を田中実穂が受け持った。本稿でも、文学についての項は行吉正一が執筆し、歴史・地理についての項「物語の舞台を訪ねて」及び「散歩の行程」の一部は田中実穂が執筆した。なお年代の表記に際しては、明治元年以前は和暦を先に、明治元年以降は西暦を先に表記した。3回の講座の内容は以下のとおりである。

1. 小泉八雲の「雪おんな」の青梅を歩く

講義 日時 2010年11月5日(金) 14:00～15:30

場所 東京都江戸東京博物館 会議室

散歩 日時 2010年11月12日(金) 13:00～16:30

散歩 J R 青梅駅→住吉神社→宗建寺→調布橋(雪おんな緑の地碑)→旧宮崎家住宅→青梅市郷土博物館→多摩川川原(釜の淵公園)→J R 青梅駅

2. 療養所の町と文学

講義 日時 2011年11月1日(火) 14:00～15:30

場所 東京都江戸東京博物館 会議室

散歩 日時 2011年11月8日(火) 13:00～16:30

散歩 西武池袋線清瀬駅→中央公園(清瀬病院跡)→(バス)→国立ハンセン病資料館(国立療養所多磨全生園)→(バス)→西武池袋線清瀬駅

3. 大岡昇平『武蔵野夫人』の小金井を歩く

講義 日時 2014年1月28日(火) 14:00～15:30

場所 東京都江戸東京博物館 学習室

散歩 日時 2014年2月28日(金) 13:00～16:30

散歩 J R 中央線武蔵小金井駅→貫井神社→薬師通り→幡随院^{ばんずいいん}→西念院→金蔵院→中村研一記念小金井市立はけの森美術館→富永次郎宅跡→都立武蔵野公園・野川・はけの小路→J R 中央線武蔵小金井駅

1. 多摩文学歴史散歩について

多摩地域をテーマとする本講座の名称は「文学歴史散歩」とした。実際に現地を歩いて学習する講座

は、「文学散歩」あるいは「歴史散歩」と称する場合が多いが、あえて「文学歴史散歩」としたのは、次のような理由からである。2001年度から2009年度にわたって、講座「漱石文学散歩」を「えどはくカルチャー」で実施した。¹⁾それは、夏目漱石の代表的な小説を鑑賞し、それらの舞台となった地域を実際に歩くという講座であった。この「文学散歩」を行った結果、漱石文学の鑑賞のためには、その舞台となった地域の歴史や地理の説明も必要となった。その「文学散歩」の実体は、「文学散歩」であると同時に「歴史散歩」でもあった。この「漱石文学散歩」に続く、多摩地域をテーマにした講座も、「漱石文学散歩」と同様、文学作品の鑑賞とともに、舞台となった地域の歴史と地理の説明を行うことを目的としたので、講座の内容を正確に表現するため、名称を「多摩文学歴史散歩」としたのである。

また、文学歴史散歩を行うに際し、多摩地域を舞台とする文学作品を選んだのにも理由がある。東京都江戸東京博物館は、東京都の歴史と文化を振り返ることにより、未来の東京都を考える博物館として開館した博物館であり、地域的には、区部だけでなく、多摩地域や島嶼地域もその範囲に入る。東京都でも、区部、多摩地域、島嶼地域は、それぞれ異なる独自の風土や歴史や文化を有している。主に区部をとりあげた「漱石文学散歩」に続いて、多摩地域にも焦点を当て、そこを舞台とした「文学歴史散歩」を行うことは、東京都江戸東京博物館にとって意義ある事業であると考え、多摩地域を選んだわけである。

2. 多摩文学歴史散歩の記録

(1) 小泉八雲の「雪おんな」の青梅を歩く

多摩文学歴史散歩の第1回目は、小泉八雲（ラフガディオ＝ハーン）の「雪おんな」をとりあげた。八雲の「雪おんな」は、よく知られている怪談であるが、この作品は青梅市に伝承されている話が基になって書かれたものである。1日目の講義では、小泉八雲、「雪おんな」、そして、舞台となった青梅地域について説明し、2日目では、実際に、青梅市にある「雪おんな」ゆかりの地を巡った。

①小泉八雲「雪おんな」について

(ア) 小泉八雲

こいずみ やくも
小泉八雲、ラフガディオ＝ハーン（Patrick Lafcadio Hearn・1850～1904）は、ギリシア駐在イギリス軍医とギリシア人の女性との間に生まれた。両親の離婚後、イギリスとフランスで教育を受けた後、19歳の時、アメリカに渡り新聞記者になる。アメリカにヨーロッパの作家を紹介し、また、東洋や日本への関心を持つ。1890年（明治23）、39歳のとき、特派員として来日し、島根県松江の島根県尋常中学校と島根県尋常師範学校の英語教師となる。1891年（明治24）、日本人の小泉セツとその家族と共に熊本に移り、第五高等学校で英語を教える。1896年（明治29）、小泉セツと正式に結婚し、日本に帰化、「小泉八雲」と改名する。東京帝国大学文科大学講師となり英文学を講ずることとなり、住居を牛込区市ヶ谷富久町21番地（現：新宿区富久町3-30）に移す。¹⁾1902年（明治35）、大久保村西大久保265番地（現：新宿区大久保1-1-17）に移転する。1903年（明治36）、教師を外国人から日本人へ切り換えてゆく

政策の中で、東京帝国大学を解雇される。後任は、夏目漱石であった。1904年(明治37)、東京専門学校(早稲田大学の前身)講師となるが、狭心症のため急逝。東京の雑司ヶ谷墓地に葬られる。

八雲は、日本の古典などに取材した怪奇物語『怪談』(KWAIDAN,1904)や、日本を欧米に紹介する随筆『知られざる日本の面影』(Glimpses of Unfamiliar Japan,1894)などを著した。八雲の、日本の風俗風習、信仰、伝説などの紹介は、日本での直接体験に基づいており、文化人類学民俗学的な性格を帯びていたといえる。また、西洋人的優越感や異国趣味の好奇心がなく、欧米人に日本の真実の姿を伝え得た功績は極めて大きい。

「えどはくカルチャー」では、『知られざる日本の面影』(Glimpses of Unfamiliar Japan,1894)から「日本人の微笑」(The Japanese Smile)の一部を紹介したが、ここでは割愛する。そこには、急速に近代化してゆく日本への鋭い批評が込められている。²⁾

(イ)「雪おんな」

小泉八雲は、亡くなる半年ばかり前に、短編小説集『怪談』(*Kwaidan: Stories and Studies of Strange Things*) (ボストン、ニューヨーク、ホートン・ミフリン社 1904年)を刊行した。『怪談』には、日本の伝説や古典に取材した怪談奇話17編と昆虫についての3編のエッセイ「虫界」が収められている。怪談の「雪おんな」は、その中の1編である。

八雲の作品は、すべて英語で書かれており、『怪談』も英語によって刊行された。八雲は、日本語による日常の会話も片言で、読むほうもそれほどできなかった。取材のときは、セツ夫人をはじめとする日本人から昔話や説話を聞き、それを基に、独自の解釈を加え、抒情豊かな作品とした。セツ夫人は松江藩士の娘で、芝居や謡曲にも深い造詣があり、話の素材と八雲の間に介在したその存在は大きいと言われている。

「雪おんな」のあらすじは、以下のとおりである。まず、この話が、武蔵国西多摩郡調布村(現：東京都青梅市)の百姓が私に語ってくれた話であることが述べられる。武蔵国のある村に、茂作と巳之吉^{もさく みのきち}という木こりが住んでいた。茂作は年老いており、巳之吉はまだ若かった。冬のある日、吹雪で帰れなくなった2人は小屋の中で寝ることにする。顔に降りかかる雪に巳之吉が目覚めると、白装束の美しい女がいた。その女が茂作に息を吹きかけると茂作は凍って死んでしまった。そして、巳之吉にも息を吹きかけようとするが、巳之吉を見ると、若いので、かわいそうになったから見逃してやる、ただ、このことを一生誰にも言うな、言うとは殺してやると言って出てゆく。その翌年、巳之吉は、背が高く器量のいい旅姿の娘に出会う。「お雪」という名前であった。お雪は、両親が亡くなり、これから江戸の親類のところに行き、女中の奉公口を探すという。お雪は、その日、巳之吉の家に泊まり、2人は恋仲になり、結婚をする。お雪は、申し分のない嫁で、10人の子供もできたが、不思議なことに老いることがなかった。ある日、巳之吉は、お雪に、山小屋でのことを話してしまう。そうすると、お雪は突然立ち上り、それは、自分であると言う。あのことをしゃべったら殺すと言ったが、子供たちのことがあるので殺さない、ただ、子供たちは大切に育ててくれ、子供たちにつらい思いをさせるようなら、その報いは必ずする、とって言って、霧となり、煙出しから消えていった。そして、その後、誰も二度とお雪の

姿を見なかった。

（ウ）青梅と雪女伝説

八雲の小説には、「再話」という手法がとられているものが多い。昔話や説話を素材にして、それを八雲が作り直して創作作品とするものである。「雪おんな」のもとになっている話については、『怪談』の序文に、次のように示されている。「『雪おんな』という奇談は、西多摩郡調布村のある百姓が、土地につたわる伝説として、わたくしに語ってくれた話。このはなしは、日本の書物にすでに書かれてあるかどうか知らないが、話のなかに出てくるあの異常な信仰は、きっと日本の各地に、いろいろの変った珍しいかたちで、つねに存在していたものであろう。」³⁾「西多摩郡調布村」とあるのは、現在の青梅市である。また、「ある百姓」から「雪おんな」の話聞いたという経緯は、次のとおりである。八雲は、1902年（明治35）、牛込区市ヶ谷富久町21番地（現：新宿区富久町3-30）から、大久保村西大久保265番地（現：新宿区大久保1-1-17）に転居した。転居した家は広く、多くの使用人を抱えていたが、そのなかに調布村の農家出身の花という娘が仲働きとして雇われており、八雲の三男、清の子守り役として約7年間奉公した。この転居にあたり、大工仕事もできる花の父親、宗八も雇われ、小泉家に頻繁に出入りした。そして、この宗八の語った「雪おんな」の話が、妻のセツを中継して八雲に伝わった。⁴⁾「雪おんな」というと、東北などの北国の話かと思われるが、八雲の「雪おんな」は、東京都青梅市の物語が基になっていたのである。

実際、「雪おんな」という物語と、当時の青梅市の歴史的地理的状況が符合する事柄は多くある。「雪おんな」では、木こりが登場するが、青梅は山間地域であり、林業が栄えていた場所である。また、この物語には、川の渡し場が登場するが、青梅には、多摩川が流れ、渡し場も青梅市内のかつての三田村から調布村まで著名な渡し場が6か所あったという。さらに、お雪が巳之吉に出会うのは、お雪が親戚を頼って江戸に行く途中であったが、青梅から江戸までは12里で、朝発てばその日のうちに江戸まで行け、青梅から江戸へ奉公に行く話は多くあったという。⁵⁾さらに、青梅には、雪女にまつわる話が多く残されている。それらの話は、八雲の「雪おんな」のような筋書きは持っていないが、どれも、雪が降ると雪女が現れるという内容である。⁶⁾

2002年（平成14）には、「雪おんな」の舞台が、青梅市であると類推されることから、多摩川に架かる調布橋（東京都青梅市千ヶ瀬町5丁目）のたもとに、「雪おんな縁の地」の碑が建てられた。講座2日目の散歩では、実際にその碑を訪れた。

②物語の舞台を訪ねて

前項「（ウ）青梅と雪女伝説」では、『怪談』の序文に「雪おんな」は西多摩郡調布村の伝説を素材としたとある。西多摩郡調布村は、1889年（明治22）に千ヶ瀬村・河辺村・友田村・長淵村が合併して成立しており、現在の東京都青梅市千ヶ瀬町・河辺町・友田町・長淵が該当する。この稿では当地を記録した資料により、「雪おんな」の背景、あわせて現地散歩の際に訪れた青梅市内の史跡などについて概説する。

武蔵の国のある村に、茂作と巳之吉という、二人の木樵^{きこり}が住んでいた。この物語のあったころ、茂作は老人であった。その雇い人の巳之吉は、十八の若者である。毎日、二人はいっしょに、村から五マイルはなれた森へ出かけた。その森へ行く途中、大きな川をわたらねばならなかった。そこに渡し舟がある。

(「雪おんな」上田和夫訳、新潮文庫、1975より一部／下線部は執筆者、以下同じ)

「雪おんな」は武蔵国の出来事だという。同作品の素材となる物語が西多摩郡調布村、つまり現在の青梅市に伝えられたことから、「大きな川」は多摩川であり、「渡し舟」は調布村に合併された旧長淵村に存在した千ヶ瀬の渡し、または河辺の渡しであると考えられる。文政11年(1828)に成立した「新編武蔵風土記稿」⁷⁾の長淵村の項には、多摩川の渡しが記録されている。

「長淵村 長淵村は、郡の西にあり、柚保長淵郷に属せり、村名の起りを詳にせず、されど郷名にも唱ふるをみれば古き村なることを知るべし、江戸日本橋より行程十二里なり、(中略)

北は多摩川に及び、川の向ひは河邊・千ヶ崎の二村なり、南北は山に亘りて、東の方は卑く、南より西にめぐりては小山つゞきにて高し、(中略)

樹木は柿・梅・松・檜・櫟等あり、獣は猪・鹿最も多し、民家九十六軒、村内に東西に貫きたる一條の路あり、是をさしはさみて左右に散在す、秣場そこはく村の南の方小名大荷田にあり、當村及び千ヶ崎河邊三ヶ村入會の地なり、(中略)

山川 多磨川 [村の北を流る、村内にかゝること凡二十一町にして隣村友田村に達す、川幅廣狭あれども凡十間許] (中略)

渡津 渡二ヶ所 [一は上長淵の内、北の方より多摩川を越て、千ヶ崎村へ通ずる渡なり、冬より春までは橋を架して往来に便す、長十二間、一は下長淵の内小名堀の内より多磨川をわたりて川邊村へ通ふ船渡なり、是も春冬は橋を架す、幅十五間許り、]

「渡二ヶ所」のうち、上長淵・千ヶ崎村間が千ヶ瀬の渡し、下長淵・川辺村間が川辺の渡しである。いずれも水量が減少する冬から春は仮の橋が架けられた。天保年間(1830～1844)に作成された同村の村鑑によると、架橋の時期は10月10日から翌年の3月10日までとし、千ヶ瀬の渡しの場合は、上長淵側から千ヶ瀬側に申し入れの上、日程を決定、経費と人足は双方の等分としていた。⁸⁾ 仮の橋が流失した場合は船頭が共同で経費を負担の上、修復をしなければならない。また船渡しの時間帯は午前6時から午後6時までとされていた。

「雪おんな」では、茂作と巳之吉が山の帰りの夜にひどい吹雪に遭い、船もなく、やむを得ず渡し守の小屋に避難する場面が描かれる。帰宅の時間がもう少し早ければ、あるいはこの後に雪おんなに見舞われる悲劇はなかったかもしれない。

また長淵村は多摩川の南岸に位置し、村内には標高250m前後の山々が連なる。樵^{きこり}である茂作と巳之吉は、森に行くために多摩川を渡らなければならなかった。二人の居住地に稼業を満たすための森が存在すれば、川を渡る必要もなかっただろう。

長淵村の対岸は川（河）辺村と千ヶ瀬（崎）村だが、この二つの村には山が存在しない。^{そまのほし}「杣保志」⁹⁾による河辺村と千ヶ瀬村の地形は次の通りである。

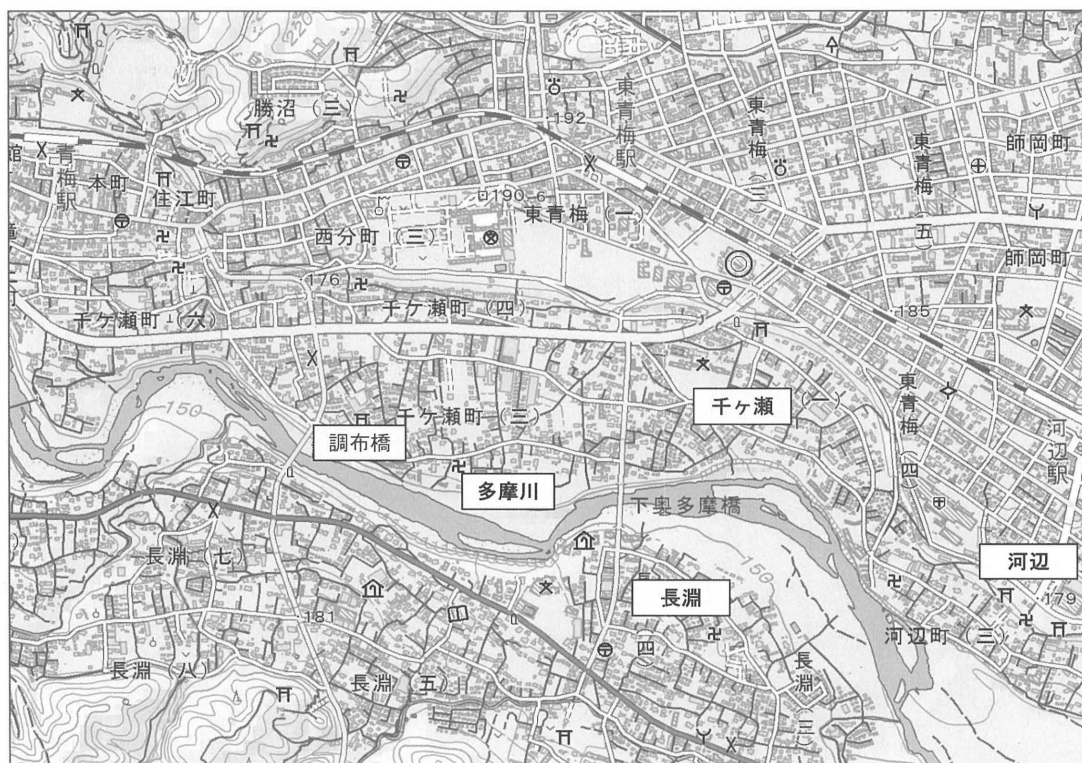
「河辺村 此村高低アツテ陸田ハ羽村・新町村ノ原地ニ続キ平坦ニシテ広く、村居ハ羽村ヨリ青梅街道ノ路下ヘ十歩計崖ヨリ下リテ南北ハ窄ク東西ヘ長キ平地ニ崖下ノ方ニ添テ民戸アリ。又夫ヨリ南ノ方玉川際ヘ少シ下テ此辺ニ民散住ス。

皆玉川ヲ南ニ受テ南北ハ窄ク西東ヘ長シ。按ズルニ古ヘヨリ此川附ノ所コソ本村ナルベシ。此ユヘ村名モ河辺トコソハ唱フルナラン。此処ニ山林并ニ泥田ナシ。皆畑ナリ。野林アリ、皆畑請ニテ百姓持ナリ。（後略）」

「千ヶ瀬村 南北ハ至テ窄ク東西ヘ長ク大低村内平坦ニシテ北ノ方ニ纔カナル丘陵アリ。南ニ玉川ヲ扣ヘ、川瀬ハ中央界也。土症真土ニテ大低陸田ナリ。泥田少シ。河辺村ナドヨリ村居モ能テ富ル民モアリ。青梅ヘハ近ク玉川有テ土症肥タリ。唯山ノナキノミナリ。」

一方、「新編武蔵風土記稿」における長淵村には、村内の秣場が河辺村・千ヶ崎村との入会地とあるが、山もまた同様と思われる。河辺村、または千ヶ崎村に住む茂作と巳之吉は、毎日片道5マイル、約8キロメートルの道のりを、途中で多摩川を船で渡りつつ、樵渡世に出かけたのだろう。

かつての千ヶ瀬の渡しの近くには、1935年（昭和10）に調布橋が架けられ、現在の青梅市千ヶ瀬町側には「雪おんな縁の地碑」が建てられている。



【地図1】多摩川・長淵・河邊・千ヶ崎の位置関係 国土地理院発行 2万5千分の1地形図より作成

③散歩の行程

講座の2日目では、「雪おんな」にまつわる伝説が残る現在の東京都青梅市内を、JR青梅駅を発着地点として、下記の行程により現地散歩を行った。

- a. JR青梅駅・青梅街道
- b. 住吉神社
- c. 宗建寺
- d. 調布橋（雪おんな縁の地碑）
- e. 旧宮崎家住宅・青梅市郷土博物館
- f. 釜の淵公園

a. JR青梅駅・青梅街道

青梅市は東京都の北西部に位置し、総面積は103.31平方キロメートル。市域は関東山地の西部と、扇状地上に展開する東部、市の南側を流れる多摩川流域の河岸段丘部に分けられる。

「青梅」という地名は、市内天ヶ瀬の青梅山無量山金剛寺にある梅に由来するとされており、「新編武蔵風土記稿」は下記の通り伝えている。¹⁰⁾

「(前略) 縁起に據に承平年中平将門この地に佛縁を結び、一枝の梅をさして我願成就あらば榮べし、しからずんば枯よかしと誓ひしに、其枝果して新芽を抽て枝葉年を逐て繁茂せり、将門誓ひの驗ありしを喜て、當村に佛閣を剏立し、京洛蓮臺寺の寛空僧正を請て開山にあてられしとせしかど、寛空頻にこれを辞し、弘法自作の遺像を此地に下して開祖に擬し、寺を金剛と名け、又更に将門護持の彌陀を安置して、無量壽院と號せしとぞ、かのさす所の梅實を結て後、成熟の時を歴るといへども常に青色を存して標落せず、世人奇異の思をなし、是より地をも青梅と呼べりと、」

承平年間（931～938）に平将門が祈願を込めて植えた梅樹の実は、完熟の季節を迎えてもなお青々としていたという。同族に対する武力行使を発端とした「平将門の乱」は関東の広範囲に拡大したためか、現在でも各所に様々な伝説を残している。

もっとも将門の行動範囲をかながみて、十方庵敬順は紀行文「遊歴雜記」（文化11年）においてこの説を異としている。地名の考察と当時の青梅村の様子の見聞は下記のとおりである。¹¹⁾

「一 武州^{たま}多磨郡^{アウメ}青梅（東京都青梅市青梅）は、野老沢^{おうめ}（所沢）の西南三里余にあり、凡東武より行程拾余里の間、繁榮なるは野老沢・八王寺（ママ）・青梅の三ヶ処にあるべし、^{ナカンツク}就中青梅の駅は町並よく、長さ拾七八町、家作の容^{カサク}躰^{ヤウタイ}又粒^{アキウドソコバク}だちし商人若干ありて、繁花なる事川越^{シロシクマチ}の城下町に似たり、土人の日、青梅と八王子とくらぶれば、^{セバ}狭きにいたりては八王子^{ヲト}に劣れり、又日夜莫^{バクタイ}大の金銀融通にいたりては、八王子よりも遙に増れりとなん、^{マサ}実も里人のいえる如く、土地甚賑はしく、予が逍遙せし日は、折しも^{イチビ}市日なりしま、都鄙の群集^{グンジウ}大方ならず、一切の品々往還^{アキマ}にならべて明間^{カフヒト}なく買人、売人、ゆく人、かへ

る徒、片鄙の駅には目を驚せり、此市例月六斎のよし、別して此近郷にて織上し木綿嶋を此町へ持出してひさぐを以て、青梅嶋と称して名産と持はやし、他国に類なし、

且又、此地を青梅と名付る事は、当所に青梅山金剛院〔真言〕といふあり、寺領貳拾石とかや、此境内にむかし平親王将門の植置し梅の樹あり、古木にして高さ貳尺余、双方へ枝蔓る事凡八九間、但しむかしの樹は枯失て今成木せしは根茎より生ぜし若木となん、しかれども貳百有余年の古樹としたり、此樹去年梅の実枝ごとに有て、今年花納り実をむすぶを待て、去年の実は枝より落て入替るとなん、年々極てかくのごとし、常住青梅の枝にたえざるによつて青梅と号くと巷談す、但、何十梅の青きといへる説は非也、夫金剛院の梅は熟すといへども、帯強く堅くして落ず、枝にあるは青きが如し、故に青梅の号起れりとかや、案ずるに、将門の古跡は武・総・常の三ヶ国の内に尤多く、末世の今にいたるまでそれぐに残りしものに霊あるは奇といふべし、されど予が青梅の里に罷りし頃は、四月下旬なれば、青き梅の枝にあるは世上の習ひなれば、証とはなしがたし、後人見て評すべきものおや、

現地散歩の発着点としたJR青梅駅の所在地は、江戸時代の青梅村に該当する。「新編武蔵風土記稿」に、「東西十五町餘り、南北五町程、村の中央東西への往還一條東西へ貫き、民戸四百二十軒餘、大抵簷を並べ左右に連綿し又は他所にも散住せり、街道にはあらざれども甲州へ往返の旅人多くこゝに路をとれり、故に甲州裏道と云、」とあるように、新宿追分と青梅を結ぶ青梅街道沿いに町並みが続く宿場町でもあった。

青梅街道は、青梅村の北部に位置する上成木村・下成木村などで産出される石灰を運搬、江戸城の建築に使用するために開かれたとされる。後に石灰の輸送が陸路から水路に変更されると、江戸と多摩の山間部を結ぶ役割が強くなる。また青梅から九里ほどで甲州に達することから、文中下線部のとおり「甲州裏道」とも言われていた。

人や物が往来する街道が地域に及ぼす影響は大きく、青梅も例外ではない。青梅村にはしまいち縞市といわれる市が毎月立てられ、特産の青梅縞をはじめ、様々な品物が売買されていた。村人も耕作や織物のほかに「商買の業をなして生産をなすもの多し」であったという。

1872年（明治5）には青梅村を含む西多摩郡と北多摩郡・南多摩郡が神奈川県に編入されたが、1893年（明治26）には東京府に編入された。1894年（明治27）には、江戸時代から石灰を産出していた多摩川沿いの日向和田・二俣尾に進出したセメント会社の石灰運搬のため、立川－青梅間に青梅鉄道が開業した。当時の停車場は立川・拜島・福生・羽村・小作・青梅であったが、順次、旅客貨物の取り扱いの増加、及び西への延伸を行い、1944年（昭和19）に国鉄に編入、青梅線となった。



青梅街道の様子（2010年6月撮影）

b. 住吉神社 (青梅市住江町12)

応安2年(1369)創建、江戸時代には青梅村の総鎮守であった。青梅街道の北側にあり、稲荷山と呼ばれる小高い丘にある。「柚保志」によると、末社として弁財天と稲荷小社があり、本殿の東には毎年3月27日・28日に開催される祭礼に使われる茅葺の芝居場があった。本殿は正徳6年(1716)、拝殿は文政7年(1824)から天保6年(1835)の建立であり、特に拝殿は江戸の三井家や内藤新宿、新吉原からの寄進により造営された。天井に描かれた青梅村中町(現:青梅市仲町)の年寄を務めた小林天測(安永7年(1778)~文久3年(1863))による雲竜図は、青梅市有形文化財に指定されている。¹²⁾



住吉神社 入口



住吉神社 拝殿正面

c. 宗建寺 (青梅市千ヶ瀬町6-734)

臨済宗の寺院で山号を仙桃山と号する。本尊は毘沙門天で青梅七福神の一つ。当初は浄土宗であったが、臨済宗に改宗、多摩川の対岸に位置する下長淵の金剛山玉泉寺の末寺となった。¹³⁾

「柚保志」には「寺領モ僅ノ寺ナレド当村ハ不残、青梅ノ町ニモ檀家有テ、小寺ナレドヨキ寺ナリ。」と記される。境内には青梅村下町の文人、根岸典則(宝暦8年(1758)~天保元年(1830))の墓がある。



仙桃山宗建寺の山門

d. 調布橋 (雪おんな縁の地碑) (青梅市千ヶ瀬町5丁目)

「雪おんな」の舞台が、調布村であると類推されることから、2002年(平成14)、調布橋のたもとに「雪おんな縁の地」の碑が建てられた。

e. 旧宮崎家住宅（青梅市駒木町1丁目684番地 青梅市立郷土博物館内）

19世紀初頭に建てられたと考えられる、東京都西北部の山間にある農家。この地方独特の杉皮と茅を交互に混ぜる屋根の葺き方が特徴的。もとは、北小曾木村（現：青梅市成木8丁目夕倉地区）にあったが、1977年（昭和52）に所有者の方より青梅市へ寄贈され、1978年（昭和53）、国の重要文化財に指定された。1979年（昭和54）青梅市郷土博物館の隣地へ移築復元工事が行われた。

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1丁目684）

1974年（昭和49）開館した市立の歴史博物館。釜の淵公園内にある。青梅市の考古・歴史・民俗資料を収集・保存し展示する。

f. 釜の淵公園（青梅市駒木町3丁目）

青梅市郷土博物館、旧宮崎家住宅一帯を含む公園で、多摩川河原も含む。「釜の淵」の地名は、かつて多摩川の水量が今よりも多く、深さや形が釜のようだったためといわれる。

(2) 療養所の町と文学 —東京療養所・清瀬病院、多磨全生園—

多摩文学歴史散歩の第2回目は、清瀬市、東村山市の療養所を舞台とした作品をとりあげた。

清瀬市には、昭和時代以降、東京府立清瀬病院をはじめ、多くの結核療養所ができた。俳人の石田波郷や小説家の吉行淳之介も、清瀬の病院で結核の治療をし、そのときの経験を作品に残している。また、東村山市には、ハンセン病の療養所、^{ぜんせいえん}全生園が、1909年（明治42）に創立された。全生園に入院していた北条民雄は、ハンセン病をテーマとした小説を書いた。

1日目の講義では、石田波郷の句集『惜命』の中の俳句、同じく波郷の随筆集『清瀬村』、そして、吉行淳之介の短編小説「漂う部屋」、北条民雄の短編小説「望郷歌」を読み、それらの作品の舞台となった療養所や清瀬市などについて説明した。2日目では、実際に、清瀬病院跡の清瀬中央公園、国立ハンセン病資料館と多磨全生園とを訪れた。国立ハンセン病資料館と多磨全生園では、学芸員、黒尾和久氏に解説をしていただいた。

①石田波郷

(ア) 石田波郷

^{いしだはきょう}石田波郷（1913年（大正2）～1969年（昭和44））は、愛媛県温泉郡垣生村^{はぶむら}（現・愛媛県松山市西垣生町）に生まれた俳人。1930年（昭和5）、松山中学卒業後、水原秋桜子主宰の「馬酔木」に投句を始め、1932年（昭和7）、上京し、秋桜子の庇護をうける。1943年（昭和18）、30歳の時に召集され中国に渡るが、結核を発病し、1945年（昭和20）、日本に送還される。1948年（昭和23）、35歳のとき、結核治療のため、清瀬村の国立東京療養所に入所、第一次、第二次成形手術を受け、翌年には、第三次手術（肋膜外合成樹脂充填術）を受ける。1950年（昭和25）に退所し、江東区北砂町1-805（現：北砂2丁目付近）の自宅に帰る。晩年も、入退院を繰り返し、闘病生活を送るが、1969年（昭和44）、56歳、肺結核で死去。

波郷は、水原秋桜子門下の代表的俳人で、「俳句は生活そのもの」と考え、「ホトトギス」の「花鳥諷

詠」に対して、中村草田男、加藤楸邨とともに人間探求派と呼ばれた。

清瀬とのかかわりは深く、1957年(昭和32)には、清瀬中学校の委嘱により校歌を作詞している。また、清瀬市は、2009年(平成21)より、波郷没後40周年を記念して、「石田波郷俳句大会」を開催し、石田波郷新人賞を設け、清瀬市における俳句文化の振興を図っている。

また、12年間住んだ江東区北砂町には、石田波郷記念館(江東区北砂5-1-7 江東区砂町文化センター2階)がある。

(イ) 結核と清瀬

結核は、結核菌によって引き起こされる感染症。結核菌は主に肺の内部で増えるため、咳、痰、発熱、呼吸困難など、風邪のような症状を呈することが多い。また、肺以外の臓器が冒されることもあり、腎臓、リンパ節、骨、脳など身体のあらゆる部分に影響が及ぶことがある。

日本では、明治以降の産業革命による人口集中に伴い、結核が広く蔓延し、多くの国民が結核により亡くなり、「国民病」とも呼ばれた。

多くの文学者も結核に苦しみ、正岡子規、樋口一葉、石川啄木、堀辰雄、梶井基次郎、吉行淳之介なども結核を患った。文学作品の中では、結核は、薄倅の才子佳人の病気として描かれることが多く、結核と文学は関連が深い。正岡子規は結核を病み、血を吐くまで鳴きつづけるというホトトギスに自らをなぞらえて子規(ホトトギスの意)という号をつけた。また、徳富蘆花の『不如帰』では、悲劇のヒロイン浪子は、結核にかかり、夫を慕いつつ死んでゆく。堀辰雄の『風立ちぬ』は、サナトリウム(結核など、長期的な療養を必要とする人のための療養所)における末期患者を主人公にしたものである。

結核の治療としては、サナトリウム療法、外科療法、化学療法と進化してゆき、現在の日本では、化学療法により、結核による死亡率は低くなっている。サナトリウム療法とは、高地などの療養所で、清浄な空気を呼吸し、栄養を摂取し、規則正しい療養生活を送ることにより、結核を治療しようとする考えに基づいた結核治療法で、日本では、明治20年代以降、東海道線沿線の湘南海岸に多くのサナトリウムが開設された。外科療法とは、患部へ外科的手術を行い、結核菌の増殖を抑えたり除去を行うもので、敗戦後の日本の最先端の結核治療は外科手術であった。そして、その舞台が清瀬であった。1931年(昭和6)、東京府立清瀬病院ができ、それ以降多くの結核療養所が清瀬に集まり、日本の結核医療の中心地となった。石田波郷や吉行淳之介は、この時期に清瀬の療養所に入所し、いずれも当時最先端の外科治療を受けている。1944年(昭和19)に発見された抗生物質のストレプトマイシンにより、結核の化学療法が始まり、結核は激減し、文学と結核の関係も薄らいでいった。

(ウ) 句集『惜命』

石田波郷は、国立東京療養所から退所した1950年(昭和25)の6月、37歳のとき、句集『惜命』(作品社1950年(昭和25)6月)を刊行した。国立東京療養所に入所した1948年(昭和23)から退所した1950年(昭和25)までの2年4か月間の作品506句を取める。正岡子規を先駆とする闘病俳句の傑作と位置付けられる。

「えどはくカルチャー」では、『惜命』の中から下記の句を紹介した。なお、本文は、『石田波郷全集第二巻 俳句Ⅱ』(富士見書房1987年(昭和62)9月)による。

夜半の雛肋剖きても吾死なじ
松の蕊千萬こぞり入院す
妻ゆきし萩しづまりぬ道を閉ぢぬ
金の芒はるかなる母の禱りをり
病む六人一寒燈を消すとき來
父無き冬子等は麒麟を始めて見き
七夕竹惜命の文字隠れなし
遠く病めば銀河は長し清瀬村
朱薬割くや歡喜の如き色と香と

【鑑賞】

- ・『惜命』（作品社 1950年（昭和25）6月）の中の句は、句作順に配列され、また、まとまりごとに題名を設け、俳句物語風に構成されている。

よわ^{よわ}あばらさ^{あばらさ}
夜半の雛肋剖きても吾死なじ

- ・「春へ」の中の一句。季語は「雛」で仲春。
- ・国立東京療養所に入所する2か月前の句。1948年（昭和23）3月5日、江東区北砂町1-805（現：北砂2丁目付近）の自宅に国立東京療養所の宮本忍医師が来診した。手術を受ければ治癒する可能性があるという診断を受け、手術を決心し、その夜の感慨を詠んだもの。波郷の随筆『清瀬村』（四季社1952年（昭和27）11月）に次のように書き、そのあとにもこの句が挙げてある。「私は助かるだらう。その夜は昂奮してなかなか眠れなかつた。妻も二人の子もよく睡つてゐるらしい。仕舞ひ忘れた乏しい雛が、夜半の病室の片隅に赤々と灯をうけてゐた。」

しん^{しん}
松の蕊千萬こぞり入院す

- ・「療養所」の中の一句。季語は「松の蕊」で晩春。
- ・国立東京療養所に入所するときの感慨を詠んだもの。波郷が入所したのは、1948年（昭和23）5月7日。
- ・「松の蕊」とは、蕊のように立って芽吹く松の新芽のこと。
- ・昭和以降、清瀬には多くの医療施設が集中し、武蔵野の松林、雑木林に囲まれた病院街を形成していた。「千萬こぞり」が、広い松林を示している。また、この時期は、敗戦からまだ時がたっておらず、波郷の住んでいた江東区あたりは、空襲を受けて焼け野原となっており、清瀬一帯が江東区と対照的に、緑に囲まれた地域であったことがうかがえる。

はぎ^{はぎ}
妻ゆきし萩しづまりぬ道を閉ぢぬ

- ・「凡に見ず」の中の一句。季語は「萩」で初秋。
- ・見舞いにきてくれた妻が、帰ってゆく様子を詠んだ句。妻が、道をふさぐように茂った萩の枝をかき

分けて通ったあと、また、萩の枝が道をふさいでしまうという叙景には、作者の孤愁が強く込められている。

金の芒すすきはるかなる母の禱いのりをり

- ・「肋あはれ」の中の一句。季語は「芒」で秋。
- ・波郷は、1948年（昭和23）5月7日に国立東京療養所に入所するが、この入院前の4月、母親が突然上京してくる。波郷の看病のためだったが、実際には何もすることがなく、それを寂しそうにする母親。第1回目の手術の日が秋と決まり、母親は、愛媛県に帰郷する。母親が、秋に行われる、息子の手術成功を祈るという句。「金の芒」という語句が、清浄な清瀬の秋の空気と、はるか四国愛媛の遠さを示しているように読める。

病む六人いちかんとう一寒燈を消すとき來

- ・「ベトレヘムの鐘」の中の一句。季語は「寒燈」で冬。
- ・波郷自身による「借命五句自解」（『石田波郷全集 第七卷 鑑賞Ⅱ』（富士見書房 1988年（昭和63）2月）には以下のようにある。「（昭和）23年1月8日作。前年12月2日に二次形成をやつて第五-第七肋骨を切除した。一応手術を了し成果を待つてゐるときである。前記したやうに私の病室には私を入れて六人の患者がゐた。（中略）小さな悲喜を交へた一日も昏れ、附添も部屋を出て行つてしまつた、もう九時消燈の時刻がくるのである。燈を消せばもう本もよめず、余り話も出来ぬ、すぐ眠れ、ばよいが大ていは眠れない。いやでもたつた一人で暗黒の中で宿命の病愁に直面しなければならぬのである。だから患者たちは九時になるともう「消燈か」と呟いた。」

父無こちき冬子等は麒麟を始めて見き

- ・「屍の眺め」の中の一句。季語は「冬」で冬。
- ・波郷の随筆『清瀬村』には、「父居ぬ冬子等は麒麟をはじめて見き」とある。この「父居ぬ」より、『借命』の「父無き」のほうが、父の不在をより強く表現し、死さえ覚悟している結核による入院がより強調されている。
- ・1948年（昭和23）12月、波郷は2回目の手術を終え、新しい年を妻と病院で迎えたが、1月の末には、なお付き添うという妻を子供らのもとに帰した。『清瀬村』には、この句に続けて、次のように記す。「四月ぶりに子等の許に帰つた妻は、早速子等を動物園に連れて行つたのだらう。」
- ・冬の動物園のキリンとは、どことなく寂しい感じがするが、子供たちと一緒にいてやれない申し訳なさがにじみ出ている作品。

七夕竹たなばたけしやくみょう惜命かくの文字隠れなし

- ・「動悸」の中の一句。季語は「七夕」で初秋。
- ・国立東京療養所での七夕行事の中で、短冊に「借命」（“命を惜しむ”の意）の文字が記されたものがあり、

その文字が、竹の葉の中でも、はっきりと眼に映ったのである。句集『惜命』の名ともなった句。

遠く病めば銀河は長し清瀬村

- ・この句は、岩波文庫『石田波郷句集』（角川書店 1952年（昭和27））内の「惜命」におさめられている句。季語は「銀河」で初秋。
- ・妻子から離れて入院生活をしている清瀬村は、豊かな自然に囲まれ、銀河も美しく見える。妻子の住む下町（江東区北砂町1-805（現：北砂2丁目付近））よりもはるかに美しく見えたのであろう。「清瀬」という地名も、清浄な感じを引き立たせる。
- ・なお、この句と前の句が刻まれた句碑が、清瀬市中央公園（清瀬市梅園一丁目613）に2013年（平成25）に建立された。

朱欒割くや歡喜の如き色と香と

- ・「捨菊」の中の一句。季語は、「朱欒」で晩秋。
- ・朱欒は、大型の柑橘類で、波郷の故郷である愛媛県から送られてきたものであろうか。朱欒を切ると、鮮やかな色が目に飛び込み、また、甘い香りがたち、生命力のほとばしりを強く印象付ける。病を得ている自分に瞬時、生命力を喚起してくれた喜びが感じられる。

(工) 随筆集『清瀬村』

石田波郷は、1952年（昭和27）11月、39歳のとき、国立東京療養所での療養時代を描いた随筆集『清瀬村』（四季社 1952年（昭和27）11月20日）を刊行した。国立東京療養所を退院したのが、1950年（昭和25）2月であるから、退院から約3年後、俳句集『惜命』出版から約2年後である。『清瀬村』の「あとがき」に、波郷は、「療養は社会から脱落して休養することではなくて、新しい一つの世界を得ることであつた。貧しい私は、結核菌のおかげで一つの富をえたといへなくもない。（中略）清瀬村は私が二年間療養所生活をした村であり、今でも故郷のやうになつかしい村である。」と記し、清瀬村での療養生活が、貴重な時間であったことを述べている。

「えどはくカルチャー」では、随筆集『清瀬村』の中から、その一部を紹介した。『清瀬村』には、34編の随筆が収められており、随所に波郷の句が挿入されている。紹介したのは、随筆中、最初の章「胸中の球」の中の「胸変形」という節である。「今朝は食事は勿論一杯の水も飲まない。」という手術の日の朝を記した文章から、手術直後を記した「私は何か言わうとしたが、言葉は出なかつた。」という文章までである。これは、波郷が、国立東京療養所に入所して最初の手術を受ける個所である。

この部分では、手術中の半麻酔の状態で覚えていることが記されている。それは、半麻酔状態そのものの客観的な描写であり、文学者ならではの描写といえる。

その中には、「花圃に水汲める見てをり手術前」、「たばしるや鶉叫喚す胸形変」の2句が収められている。前者は、手術の日の朝、花壇に水やりをしている知り合いの患者がおり、彼と波郷が会話を交わしたことを詠んだ句である。知り合いは、波郷がその日手術を受けることを知って、手術後、花を届けると伝える。手術前の緊張をほぐすようなこの会話の後にこの句が挿入される。後者は、手術で肋骨が

切除されたことを詠んだ句。波郷はこの時の手術で、右第一から第四までの肋骨を切除した。「たばしる」とは、「勢い激しくとびはねる。ほとばしる」という意味。「鴟」は、肉食の小鳥で、キーイツと鋭い声で鳴く。「胸形変」は波郷の造語。短く漢字を重ね、肋骨切除の激しさを伝える。波郷はこの句の後に「このときの奔湍的電流的な衝撃、手術の幕が切つて落とされた感じ、忽ちにして肋骨をとられた胸形変じる相を、声調として現わさうとした。」と自解している。

②吉行淳之介

(ア) 吉行淳之介

よしゆきじゆんのすけ
吉行淳之介（1924年（大正13）～1994年（平成6））は、岡山県岡山市桶屋町43番地に父・吉行栄助（詩人）、母・安久利（美容師）の長男として生まれ、2歳の時、東京に移住。1945年（昭和20）東京帝国大学文学部英文科に入学し、その年に敗戦を迎える。1947年（昭和22）大学を中退し、出版社で雑誌の編集を行いながら同人雑誌に小説を発表する。

1952年（昭和27）、28歳の時、健康診断で肺に結核による空洞が発見され、翌年、国立療養所清瀬病院に入院。1954年（昭和29）1月、左肺区域切除の手術を受ける。入院中の1954年（昭和29）7月、30歳のときに、小説「驟雨」で第31回芥川賞を受賞するが病状悪く表彰式には欠席する。

第一次戦後派作家（野間宏、椎名麟三、埴谷雄高、加藤周一、中村真一郎など）、第二次戦後派作家（大岡昇平、三島由紀夫、安部公房、島尾敏雄、堀田善衛など）に続く世代として、「第三の新人」の作家と呼ばれる（安岡章太郎、遠藤周作など）。

吉行淳之介の作品においては、「性」による関係を通して人間存在の本質が問われ、もっぱら狭い閉ざされた場での人間心理の葛藤が凝縮したイメージを通して描かれる。私小説的な作品が多く、非政治的な傾向がある。また、大仰な振る舞いを嫌った雰囲気がある。軽妙な随筆もあり、座談の名手でもあった。1994年（平成6）、肝臓癌のため70歳で死去。

静岡県掛川市にある社会福祉法人ねむの木福祉会（宮城まり子設立）の敷地内（静岡県掛川市上垂木あかしあ通り1-1）に「吉行淳之介文学館」がある。

(イ) 『私の文学放浪』

『私の文学放浪』は、1965年（昭和40）5月、41歳のときに講談社から出版された吉行淳之介の回想記。「東京新聞」夕刊に連載（1964年（昭和39）3月12日～1965年（昭和40）2月25日・全50回）したものをまとめたもので、麻布中学時代からの文学上の経験が綴られている。

「えどはくカルチャー」では、国立療養所清瀬病院入院中に第31回芥川賞を受賞した時の様子を書いた第35章の全文を紹介した。

淳之介は、国立療養所清瀬病院に約1年間入院しており、この章では、左肺区域切除の手術を受け、その手術は成功したが、その後持病の喘息が悪化したことなどが簡潔に記される。そして、大仰な振る舞いを嫌うという美学のもとに、淳之介が療養生活を過ごしていたことが描かれる。「私の神経に軋る事柄が沢山あったが、すくなくともトマス・マンの小説に出てくる療養所の文化人みたいには、なりたくないとおもい、ガラ悪く積極的に毎日を送った。小説を書いていることを隠したのも、そんな気持の

あらわれだとも見える。」という個所などにその生活美学がよく現れている。「トマス・マンの小説」とは、1924年（大正13）に出版されたドイツの小説家トーマス・マン（Paul Thomas Mann 1875～1955）の小説『魔の山』（Der Zauberberg）のことで、スイスのアルプス山脈にあるサナトリウムでのインテリ青年を描いた作品。また、淳之介の芥川賞受賞の様子は次のように書かれる。「その夜、消灯時刻の八時を一時間ほど過ぎたとき、真暗な病室の中を看護婦の懐中電灯の輪が近よってきて、私のベッドの傍で停った。私は、受賞したな、とおもった。看護婦は、「いま電話があつて、なんだかよくわかんないんだけど、ナントカ賞とかいっていたわ」といい、私が「わかりました」というと、「それでわかるの」と立去って行った。当時の芥川・直木賞の発表は、今のように華やかなものではなかった。」結核療養中に消灯したベッドの上で、芥川賞受賞の報告を事情を解さない看護婦によって知らされるという状況は寂しいものではあるが、結果として淳之介の好む状況であったのかもしれない。

（ウ）短編小説「漂う部屋」

「漂う部屋」は、吉行淳之介が国立療養所清瀬病院を退院した翌年、1955年（昭和30）11月、「文藝」（第12巻第4号）に発表した短編小説。（単行本『漂う部屋』（河出書房1955年11月）所収。）淳之介自身の国立療養所清瀬病院入院の経験をもとに、結核患者として入院した「私」が、自分を含め、入院患者たちの療養生活と心の微妙な心理を緻密な筆致で描いたもの。

「えどはくカルチャー」では、作品中から4か所を選び、鑑賞した。

一か所目は、一章の、「私」が入院して迎えた最初の夜の印象を記した部分。（「この病室の灯が消されるのは、午後八時である。」から「揺れている。漂っている。」まで。）「最後の灯が消えて、病室は松林の中に沈んだ。いや、沈んだのはこの部屋のまわりにひろがっている世界なのだ。（中略）そのような動いている人々の世界のはるか下の方に沈んで行って、私を容れた長方形の部屋だけが、暗い空間に浮かび上っている。揺れている。漂っている。」この部分によって、「漂う部屋」が病室のことであることが分かる。入院し手術を受けることへの不安が、この「漂う部屋」という詩的ともいえる言葉に象徴されている。「漂う部屋」という心象を与えたのは、清瀬の療養所が広い松林の中にあり、かつ都心から少ししか離れていない場所にあったからでもあろう。

二か所目は、二章の、「私」の手術が終わって、麻酔から覚めた後、喉の渴きを強く感じ「ビールが飲みたい」と言い、周りを笑わせる場面。（「『眼をあけなさい、手術はもう終わりましたよ』」から「と同時に、私は自分のズウズウしい男という役割を無事に果たしていることも知った。」まで。）「私」は、入院当初、療養所にも結核にもなかなか馴れず、怯え、看護婦や病院の設備や風習に脅かされていた。しかし、時間がたつにつれ病院内での自分の「役割」が定まり、安定した精神で療養所生活を過ごせるようになる。その「役割」とは「ズウズウしくてスケベエで物分りのよい人間、神経が顫動^{せんどう}を起こすこととは縁遠い人間」というものであった。そして、「私」は手術直後、「病室で私が受持っているズウズウしい男という、役割の中に、私は生きてふたたび入りこめるといふ喜ばしさもあった。」と思い、「ビールが飲みたい」とおどけて言うのである。手術成功の喜びをこのような道化によって表現するというところから、淳之介らしさがあると言える。

三か所目は、三章の、「私」と同じ病舎の患者、青山との会話の場面。（「その冬のある日、外科医長

の回診があった。」から「これは病人特有の気持の動き方で、いままでこの病室でもしばしば見ることのできたものだ。」まで。) 青山は比較的軽症の「私」と違い、学生時代に発病して以来十年近く療養生活をしている患者。「私」と青山は、偶然同じ日に手術を受けたが、青山は二週間後再度手術を受けることになり、肋骨を幾本か切り取り胸郭を狭くすることとなった。そして、その手術も無事に終わり「私」と青山のベッドが隣同士になるが、青山は「私」に対して執拗に突っかかってくる。青山は「私」に「肺のふくらみが悪いそうですね。骨を三本ほど取らなくてはいけないことになりそうですね」とか、「いやいや、ダメです、どうしても骨三本ですよ。せっかく大部屋へ戻ってきたのに、また個室へ入らなくてはいけないなんて、可哀そうだな、ハハハハ」などと言い、どうあっても「私」から肋骨三本奪い取って、青山と同じ状態にまで「私」を引落すことを念じるようなのであった。青山は日頃は気弱でおとなしい人物だが、手術の前夜などには日頃心の中に潜めて外へあらわさなかったものが外に出てしまうのか、怒りっぽく意地悪になってくるのである。そして、「私」は「これは病人特有の気持の動き方で、いままでこの病室でもしばしば見ることのできたものだ。」と評する。軽症でない結核患者は、現実社会での生活が困難となっていたり、さらに、死への恐怖も持ちながら入院生活を送っており、療養所内での患者の苦しみは「私」の乾いた眼を通して描かれている。

四か所目は、四章の、差別を受ける結核患者についての新聞記事を、患者たちが読む場面。(「その東野さんも、この大雪の日にはめずらしくベッドの上にいる。」から「静かになってしまうと、外界からの音の伝わってこない雪の日の静けさが、私には不気味な苛立たしいものにおもわれはじめた。」まで。) 「私」と同じ病舎の北川が退院することとなり、療養患者の東野が、新聞記事の投書欄を読み上げる。それによると、結核の成形手術を受けた女性が銭湯でその傷跡を見られ、中年の婦人に「こんな日にお風呂に来るのじゃなかった」と大きな声で言われる。そして、浴場中の人々が一斉に立上り、彼女の周りにガランとした空間ができたというのである。患者たちはその女性に同情を寄せる。退院することは喜ばしい事であるが、結核への差別意識のまだ残る実社会へ出ることへの不安は大きいものがあったことがわかる。

吉行淳之介の実際の経験を基にして書かれた、「漂う部屋」は、以上のように、結核患者の様々な思いを内面から描いた作品である。清瀬の結核療養所内で、実際の結核患者たちも、患者同士、また、医師や看護師との人間関係の中で、様々な思いを胸に抱きながら療養生活を送ったのであろうことがこの作品から想像できる。

③北条民雄

(ア) 北条民雄

ほうじょうたみお
北条民雄 (1914年 (大正3) ~ 1937年 (昭和12)) は、父親の赴任地、朝鮮京城府 (現：大韓民国ソウル特別市) で生まれ、母の病死により、母の生家の徳島県那賀郡に育つ。1929年 (昭和4)、14歳の時上京し、日本橋の薬品問屋の住み込み店員などとして働き、法政中学校夜間部に学び、小林多喜二などの左翼文学に影響を受ける。1932年 (昭和7)、徳島に帰り、祖父の農業を手伝い文学に没頭する。同年結婚するが、1933年 (昭和8) 5月、18歳のとき、郷里に近い小都市の病院でハンセン病の診断を

受け離婚する。そして、1934年（昭和9）、19歳のとき、北多摩郡東村山村の公立療養所第一区府県立全生病院（現在の国立療養所多磨全生園の前身）に入院する。

入院後、ハンセン病をテーマとした小説を次々と発表していったが、慢性神経症と執筆生活の過労による腸結核で、1937年（昭和12）12月、23歳で急逝した。ハンセン病自体は、まだ軽症であった。

北條民雄は、川端康成から評価され、文壇のことなど気にせず、ただよい作品を書くようにと激励を受けながら執筆した。北條民雄の作品は川端康成の眼を經、その推挙によって諸雑誌に発表された。代表作「いのちの初夜」は、「文学界」（1936年2月号）に掲載され、文壇に大きな衝撃を与え、第2回文学界賞が与えられた。ハンセン病の診断を受け、療養施設に入所してから起きたことをまとめた短編小説である。川端康成の短編『寒風』（『朝雲』（1945年（昭和20）10月25日）所収）は、北條民雄が亡くなった時のことを題材にしたものである。

なお、ハンセン病に対する偏見や差別により、本名は公表されていなかったが、2014年（平成26）、親族の了承が得られ、没後77年目に、七條^{しちじょうてるじ}晃司という本名が公開された。

北條民雄の作品は、「ハンセン病文学」と一般に呼ばれるが、「ハンセン病文学」とは、一般に療養所内で療養したハンセン病患者が、ハンセン病について書いた文学作品（小説、詩、短歌、俳句、随筆、評論など）を指す。ハンセン病文学は、『ハンセン病文学全集 全10巻』（皓星社 2002-2010）などで読むことができる。

（イ）ハンセン病

ハンセン病は、らい菌（*Mycobacterium leprae*）（1873年にノルウェーのアルマウエル・ハンセン医師が発見した）によって、主に皮膚や末梢神経、眼などが侵される慢性感染症の一つである。病型にもよるが、皮膚に結節や斑紋などが生じ、また、末梢神経が障害されることから知覚障害や発汗障害などが生じる。その結果、筋肉の萎縮、四肢などの変形、視覚の喪失などの後遺症による障害を残す場合がある。病状が進むと、喉、鼻、眼など、衣服から露出する部位が変形することから、ハンセン病患者は、偏見や差別の対象になりやすかった。しかし、らい菌が感染しても発病に至ることはまれで、また、現代では、化学療法を中心とした治療を行われ、ほぼ確実に治癒する病気となっている。

ハンセン病は、日本にも古来からあり、患者たちは差別を受けてきた。近代になると、患者に医療を行おうとする医師が現れはじめ、宗教者たちによる救済活動もなされた。1907年（明治40）には、法律（「癩予防ニ関スル件」）が制定され、放浪する患者の隔離が国家の対策として始まったが、それは治療より隔離を主とする内容であった。1931年（昭和6）には、「癩予防法」が制定され、在宅患者も含むすべての患者が強制隔離されるようになる。療養所に入所すると、患者の外出は禁止され、衣食住や介護なども患者自らが作業として行わされた。また、患者統制のため監禁室が設けられ、断種手術が施される場合もあった。アジア・太平洋戦争後、日本国憲法が公布され、基本的人権の尊重が保障されたが、国のハンセン病対策は基本的に戦前と変わらなかった。患者たちは全国癩療養所患者協議会を結成し、「癩予防法」改正要求運動を行ったが、1953年（昭和28）改正された「らい予防法」は、強制隔離政策を継続するものであった。

1943年（昭和18）、アメリカで、ハンセン病に劇的な治療効果を持つことが確認された「プロミン」は、

敗戦後、日本にも導入され、治る病気になっていった。このような状況のなか、強制隔離政策に対して、「らい予防法」改正請求書が提出され、1994年（平成6）には「らい予防法」廃止と新法制定を求める「大谷見解」が発表され、1996年（平成8）、「らい予防法」はついに廃止になった。その後、入所者たちは、国のハンセン病政策の責任を問う、「らい予防法違憲国家賠償訴訟」を起し、2001年（平成13）、国の誤りを認める判決がでて、国はこれを受け入れた。

このように、ハンセン病患者は、病気だけでなく、国家による人権侵害や社会による差別にもよって多くの苦しみを味わわれてきた歴史を持つ。そのような背景を持つハンセン病文学は、病自体の苦しみだけでなく、国家的、社会的な疎害による苦痛も描いている。

(ウ) 国立療養所多磨全生園

国立療養所多磨全生園は、東京都東村山市青葉町4-1-1にあるハンセン病患者の療養施設である。1907年（明治40）に制定された「癩予防ニ関スル件」に基づき²⁾、1909年（明治42）、公立療養所第一区全生病院（関東1府6県、すなわち東京府・神奈川県・千葉県・埼玉県・群馬県・栃木県・茨城県、および新潟県・愛知県・静岡県・山梨県・長野県の連合府県立療養所）として現在地に設立された。1941年（昭和16）には、国に移管され、国立療養所多磨全生園として発足した。2009年（平成21）には創立100周年を迎えた。

また、国立療養所多磨全生園には、国立ハンセン病資料館がある。この資料館は、国が、ハンセン病及びハンセン病対策の歴史に関する知識の普及啓発を行い、もって偏見・差別の解消及び患者・元患者の名誉回復を図ることを目的とした施設である。³⁾

(エ) 短編小説「望郷歌」

「望郷歌」は、1937年（昭和12）12月号の「文藝春秋」に発表された短編小説。北条民雄の生前に発表された最後の作品。内容の概要は以下のとおり。

25歳でハンセン病を発病し、ハンセン病療養所に入所している鶏三は、所内の学園の教師を務めている。療養所では、軽症の患者が教師も務めていたのである。学園では国語を担当しているが、愛情を持って生徒たちに接する教師である。

生徒の一人、山下太市は13歳であるが病状は進んでおり、他の子供たちとは遊ばない孤独な性格の持ち主である。鶏三は、ある日、太市が療養所内の築山（「望郷台」と患者たちに呼ばれている）のふもとで、ひとり無心に歌っているのを目撃する。それは祖母が太市に歌っていた子守唄であった。（その祖母は、太市が7歳の時に亡くなっている。）

ある日、太市の祖父が面会に来る。療養所の子供たちにとって、両親など肉親との面会はとてもうれしいものであるが、太市は祖父が来ても喜ばないどころか、泣きながら逃げてしまった。実は太市と祖父の間には次のような事情があったのである。ハンセン病が発病しそれが見つかる、強制的に療養所に入れられるため、太市の母親は押し入れに太市を隠して育てていた。太市の父親は、太市が9歳の時すでに亡くなっており、生活苦のためか、母親はとうとう他の男とどこかに行ってしまった。七十近い祖父と二人だけになった太市であったが、祖父は太市を不憫に思い、なんと橋の上から太市を突き落として殺そうとしたのであった。

幸いなことに太市は助かり、警察に連れられて療養所に入所した。太市は、そのような苛烈な経験をしたため、余計に孤独な性格となっていたのである。監獄に入っていた祖父は刑期を終え、出所したその日に、孫会いたさに療養所に面会に来る。太市は祖父に会おうとはせず、祖父は帰ってゆく。その後も祖父はやって来るが、太市は会おうとしない。

自らもハンセン病である鶏三は、その絶望的な状況を認識しながらも、太市や他の子供たちに深い愛情をもって接するのであった。

「えどはくカルチャー」では、作品中から3か所を選び、鑑賞した。本文は、『いのちの初夜 北條民雄』（高松宮記念ハンセン病資料館 2004年（平成16）4月）によった。

一か所目は、作品の冒頭部分。鶏三が、子供たちが戸外で遊んでいるのを、望郷台の上から眺め、ハンセン病に罹った子供たちの運命について思いを巡らす部分である。（「夏の夕暮だった。」から「この年にして生きねばならぬ運命を背負つてあるといういふだけでも、地上に於ける誰よりも立派な役割を果たしてゐるのではないか、よしんばこれが立派な役割だと言へない無意味な不幸であるにしても、彼はその不幸に敬意を払ふのは人間の義務であると信じたのであつた。」まで。）

鶏三が、深い愛情をもってハンセン病の子供たちに接していることが分かる部分である。ハンセン病に罹患した子供たちが健康な状態に戻る希望はなく、彼らにどのような希望を与えられるか、また、何を教えたらいいかと考える鶏三は、受け持っている科目の算術は他の教師にまかせ、自分は国語だけを受け持つ。子供たちが、残された時間を豊かに過ごすことができるようにと、童話を話したり、自由に作文を書かせたり、また、学園の外に出て自由に遊ばせたりした。鶏三が、愛情深いだけでなく、思索深くもあることがわかる。

二か所目は、太市が、祖母から教わった歌を一人で無心に歌っている部分。（「つくつく法師なぜ泣くか」から「多分頭の中にはこの歌によつて連想される数多くの思出がいつぱいになつてゐるのであらう。」まで。）祖父に橋から突き落とされるという経験をした太市は、他の子供たちと遊ぶということがまったくなく、いつも一人で、誰もいないところで遊んでいるような子供であった。ある日、子供たちと鬼ごっこをしていた鶏三は、たまたま、太市が木の葉の陰で一人、無心に両手で山の斜面に穴を掘りながら歌を歌っているのを目撃する。その歌とは次のようなものである。

つくつく法師なぜ泣くか

親もないか子もないか

たつた一人の娘の子

館にとられて今日七日

七日と思えば十五日

十五のお山へ花折りに

一本折つては腰にさし

二本折つてはお手に持ち

三本目には日が暮れて……

この歌は、祖母が太市に歌っていた子守唄であった。館にとられて一人となった娘が出てくるが、太市の立場からすると、ハンセン病療養所に入れられて一人になった自分とも重なってきたのかもしれない。作者の北条民雄は、母の生家の徳島県那賀郡で育ったが、隣県の高知県高岡郡佐川町には、「つくつく法師」という、これによく似た歌詞の子守唄がある。北条民雄は、自分が徳島県にいたころ、その「つくつく法師」に似た子守唄を聞いていて、その歌をこの作品に使ったのかもしれない。高知県の「つくつく法師」の歌詞は次のようなものである。⁴⁾

つくつく法師は なぜ泣くの
親がないか 子がないか
親もごんす 子もごんす
もひとり欲しや 娘の子
たかじよにとられて きょう七日
七日と思えば 十五日
十五の玉を 手にすえて
おじさんところへ 来てみれば
よう来たよう来た お茶まいれ
お茶でものまして 養うて
長者の嫁御に やるときにや
金襴緞子の 帯しめて
お馬ゆられて 行きました
お馬ゆられて 行きました

三か所目は、祖父が面会に訪れるが、太市が恐れて逃げ出してしまう部分。（「太市、お父さんかもしれないよ。」から「鶏三が何を訊ねてみても老人は黙つてゐる。ただ、ああ、ああと溜息をもらすだけであつた。」まで。）祖父は、孫の太市の身をあわれんで、太市を橋から突き落とし殺そうとしたのであつたが、警察に捕まり監獄に入る。そして、監獄から出たその日に、身の上を心配していた太市に会いに来たのであるが、太市は祖父の姿を見ると激しい恐怖心から逃げ去ってしまう。それを見た祖父は、ただただ絶望し下を向いたまま帰ってゆくという場面である。

この後、この祖父は、もう一度死ぬ前に孫に会いたいと、太市を訪ねてくるのであるが、太市と祖父の過去がわかった鶏三は、祖父が来たことを太市に知らせず一人で祖父と会う。しかし、祖父は、孫と会えるまで帰らないと言い泣くのであつた。それではと、鶏三が、太市を探そうと面会室の外に出ると、太市が面会室の窓の下で様子をうかがっているのがわかる。しかし、祖父の姿が見えると、太市は一目散に逃げてゆくのであつた。

愛情をお互いに持っている祖父と孫であるが、ハンセン病という病とそれをとりまく社会により、祖父は孫を殺そうとする行動に出、また、孫もそのような祖父に恐怖心を抱くという悲劇が生まれた。「望

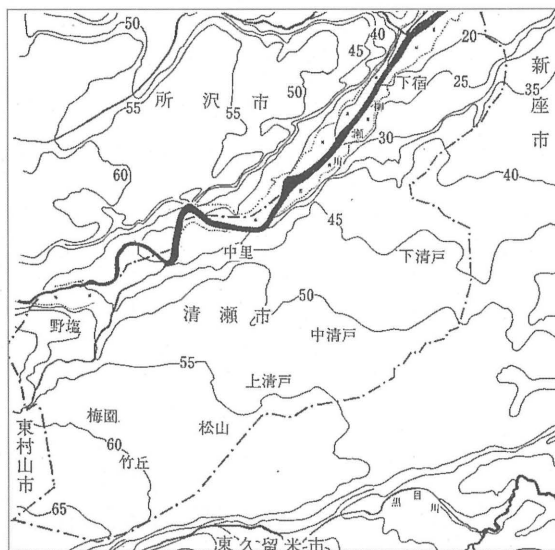
郷歌」は、そのようなハンセン病を巡る悲劇を、冷静に見つめて描いた作品である。そこには、作家、北条民雄のすぐれた文学的才能を認めることができる。

小説だけでなく短歌や詩など、多くの「ハンセン病文学」の作品があるが、それはハンセン病患者が書いたから、その価値が認められるのではなく、ハンセン病を取り巻く社会や人間をしっかりと見つめ、それをすぐれた文学作品にしているから認められるものである。北条民雄自身も、「癩文学」という呼ばれ方を嫌っていて、「癩文学などはない、あるのは、文学だけだ。」と語っていたという。⁵⁾（「ハンセン病文学」は、かつては「癩文学」と言われていた。）

④物語の舞台を訪ねて

ここでは、作品の主な舞台となった北多摩郡清瀬村（現：東京都清瀬市）の地理と歴史について概説し、作品理解の一助とすることを目的とする。

東京都の北端に位置する清瀬市は、南西から北東の方向にかけて約6.5キロメートル、南北が約2キロメートルと細長い市域が特徴である。特に長辺は、青梅を起点とする武蔵野台地の傾斜に沿う西高東低をなしており、市内の標高差は約40メートルにもなる。



【地図2】
清瀬の地形図（『清瀬市史』から転載）
数字の単位はm（メートル）

市内では現在も根菜類を主とした畑作が行われているが、その様子は文政11年（1828）の「新編武蔵風土記稿」にも見ることが出来る。⁶⁾

「野塩村附持添新田 野塩村は、郡の北の方にて當郡（※多摩郡）と入間郡との境にあり、郷庄の唱を失ふ、江戸日本橋より行程七里にあまれり、（中略）

用水には村山川を引用ゆれど、しばしば早損の患あり、地形平にして土性は眞土黒土交れり、田少なく畑多し、（中略）享保年間武蔵野開墾の地なり、民家なし、」

「清戸下宿 清戸下宿は、郡の北にあり、江戸日本橋より行程六里に餘れり、當村及び上中下の清戸をすべて清戸村と唱へしが、いつの頃にやかく四ヶ村に分れり、（中略）

北は柳瀬川に限りて入間郡坂の下村に及べり、此柳瀬川は多磨・入間の郡界なり、村の廣狭東西へ凡三十町、南北へ十五町許、平夷の地なり、土性黒土にて用水は柳瀬川を堰入るれど、水田は少なく陸田多し、水旱の患なし、」

「下清戸村 下清戸村は、郡の北にあり、清戸三村の内、下清戸を初にのせしは地理の次第によれり、江戸日本橋まで行程七里にあまれり、(中略) 平夷の地にして土性は野土黒土相交り、水田はなく陸田のみなり。」

いずれも平坦な地形であり、土性は武蔵野台地ならではの黒土である。村山川や柳瀬川の水利は存在するものの、水田は殆ど存在せず、陸田や畑が各村の多くを占めていた。

現在の清瀬市の前身となる清瀬村は、1890年(明治23)に神奈川県下における市制町村制の施行により、中清戸村・上清戸村・下清戸村・清戸下宿・中里村・野塩村・下里村飛地をあわせて誕生した。「清瀬」の由来は諸説あるが、やまとたけるのみこと日本武尊の東征時における「清き瀬なり」という言葉や、旧村名の「清戸」の「清」と市内を流れる柳瀬川の「瀬」の組み合わせと伝えられている。

中清戸村・上清戸村・下清戸村は、もとは清戸村として、志木街道の両側に沿って開発されたが、近世前期に3つに分かれ、街道沿いの村々として、交替で人馬の継ぎ立てを行っていた。また、尾張徳川家の鷹場でもあったことから、延宝4年(1676)には中清戸村に御殿(清戸御殿)が造られ、鷹狩に訪れた藩主の宿泊・休憩場所となった。

上記の清戸村3か村に清戸下宿・中里村・野塩村を加えた地域は、1872年(明治5)に神奈川県に移管された後、神奈川県北多摩郡に所属したが、1893年(明治26)、北多摩郡は南多摩郡・西多摩郡とともに東京府に編入された。

1915年(大正4)に武蔵野鉄道(現：西武池袋線)が池袋-飯能間に開通し、清瀬駅は9年後の1924年(大正13)に開設された。開設当時は利用客も少なかったが、1931年(昭和6)の東京府立清瀬病院の開院により、見舞客などの乗降が多く見られるようになった。

現在でも西武池袋線清瀬駅から都道226号線(東村山清瀬線)に出ると、道路を挟んで多くの病院が立ち並ぶ。その景観は、結核の療養を目的とした東京府立清瀬病院が設立されて以来、結核の対策を行う病院が次々と開院したことによる。当時「国民病」「亡国病」と恐れられた結核治療の最前線を担い続けた清瀬の歴史は、現代にも引き継がれている。⁷⁾

東京府立清瀬病院の設立以降、清瀬には多くの病院が集中した。昭和6年から昭和20年代における設立の状況は下記の通りである。⁸⁾

昭和6年(1931) 東京府立清瀬病院

昭和8年(1933) ベトレヘムの園(現：ベトレヘムの園病院) / 東京府立静和園

昭和11年(1936) 東京市代用病院

昭和13年(1938) 清瀬薫風園 / 浴風園 / 長生病院

昭和14年(1939) 救世軍清心療養園(現：救世軍清瀬病院)

清瀬保養園（現：竹丘病院）

上宮協会清瀬療園（現：清瀬リハビリテーション病院）

傷痍軍人東京療養所

（昭和20年に国立東京療養所と改称、昭和37年国立療養所清瀬病院と統合、現：独立行政法人国立病院機構東京病院）

昭和16年（1941）信愛病院（現：信愛病院）

昭和17年（1942）清光園

昭和19年（1944）結核予防会（現：複十字病院）

昭和22年（1947）東京市代用病院の跡地に都健保清瀬療養所を開設

昭和23年（1948）東京府立静和園の跡地に都立小児結核保養所を開設

昭和28年（1953）清光園の跡地に生光会清瀬療養所を開設

昭和29年（1954）織本病院（現：織本病院）

当時における結核の治療法は、郊外の療養所にて「大気・栄養・安静」を摂取するサナトリウム療法が主であった。武蔵野鉄道の開通により東京の中心部との往来が容易になりながらも、農地や雑木林が広く残る清瀬は、療養の地としても適所とされたのであろう。

一方、「国民病」「亡国病」を恐れる地元では、病院の建設計画に対して反対の声が強くあがった。1928年（昭和3）8月には清瀬村より下記の意見書が提出されている。⁹⁾ 鉄道の開通による住宅の分譲や人口の増加を期待していた清瀬村において、伝染力のある結核を主とした病院の開設は、地域の将来を阻害、衰退させる「忍び難キ一大痛苦」とまで例えられた。

「第二号議案

療養所設置位置変更方ノ意見書提出ニ関スル件

東京府は社会事業トシテ本村上清戸芝山清瀬駅附近ニ療養所ヲ設置セラル、趣付テハ、之レが位置変更方ニ関スル意見書（左記ノ通り）ヲ提出セントス

記

仄聞スル所ニヨレバ、東京府ハ社会事業ノ一トシテ、近ク本村上清戸芝山清瀬駅附近ニ療養所ヲ設置セラルヤニ候得共、果シテ然ラバ本村将来ニ於ケル發展上誠ニ遺憾に堪ヘザル次第ニ有之候。

蓋シ療養所ナルモノハ彼ノ恐ルベキ肺結核患者ヲ收容治療スベキモノニ有之、附近一帯は何人ト雖モ其ノ居住ヲ嫌忌スベキハ明ニシテ、府下野方町ニ於ケル東京市施設ノ療養所附近ノ状況ニ微スレバ思半ニ過グルモノ可有之候。故ニ其ノ設置スベキ位置ノ選定ニ方リテハ、関係町村ノ現状並ニ之レガ設置に因リテ其ノ町村ノ受クベキ影響等ニ関シ、特ニ慎重ナル考慮ヲ払ハレンコトヲ切望スル次第ニ有之候。

抑モ本村上清戸芝山清瀬駅附近ハ、電車乗降ノ便ハ勿論、道路縦横（東京府道第二十一号同第七十六号並ニ同第八十一号線ノ交錯セル地点）ニ通ジ、所謂四通八達ノ地域ナルノミナラズ、一帯（大部分）

ノ土地ハ客年来東京土地住宅株式会社ノ経営ニ依リ住宅地トシテ之レガ分譲ヲ受ケタルモノ頗ル多ク、遠カラズシテ多数ノ住宅ハ建設セラルベク、同地ハ当ニ本村ノ枢要ノ区タルベキニモ拘ラズ、同所ニ療養所ヲ設置セラルルニ於テハ、住宅建設ハ茲ニ全ク沮止セラルベク、本村将来ノ繁栄ハ得テ望ムベカラズ候。是レ実ニ本村ノ公益ニ関スル事件ニシテ忍ビ難キ一大痛苦ニ有之候。

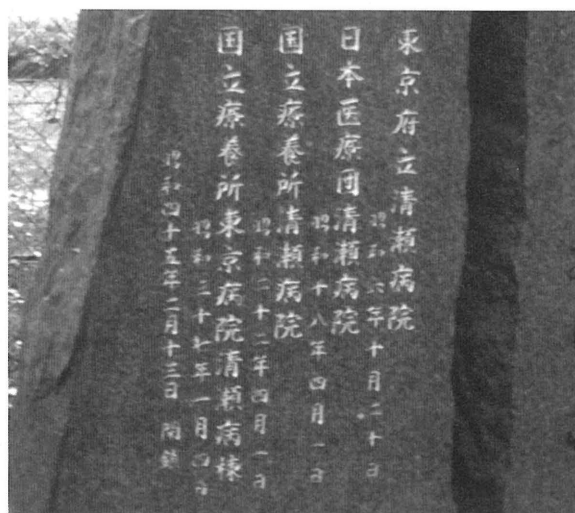
就テハ速ニ右設置ノ位置ヲ変更セラル、様致度、茲ニ村会ノ議決ヲ経テ右意見及上申候也。

昭和三年八月二十日提出

清瀬村長加藤新三郎

この意見書を受けて、病院の建設地を西多摩郡霞村付近（現：東京都青梅市）に変更するものの、現地の反対にあったことから、再び清瀬が候補地とされた。この動きを受け、1929年（昭和4）3月に再度の意見書が提出されたが、2年後に開院のはこびとなった。

東京府立清瀬病院は1962年（昭和37）に、傷病軍人東京療養所改め国立東京療養所と合併し、現在は独立行政法人国立病院機構東京病院となっている。現在、清瀬中央公園・清瀬市立図書館・国立看護大学校となった跡地の一角には「清瀬病院ここにありき」の石碑が建てられている。



清瀬中央公園に建つ「清瀬病院ここにありき」の碑には、東京府立清瀬病院の沿革が記されている。

⑤散歩の行程

講座の2日目では、西武池袋線清瀬駅を発着点として、清瀬中央公園（清瀬病院跡）と、東村山市の国立ハンセン病資料館・国立療養所多磨全生園を訪ねた。

清瀬中央公園（清瀬病院跡）（清瀬市梅園1丁目613）

清瀬市立の都市公園。公園内に、1931年（昭和6）に当時の清瀬村に開設された最初の結核療養所である東京府立清瀬病院（1947年（昭和22）に国立療養所清瀬病院と改称）があった場所を記念した「ここに清瀬病院ありき」という石碑が建っている。吉行淳之介が入院していたのはこの国立療養所清瀬病院で、石田波郷が入院していたのは、国立東京療養所である。

国立ハンセン病資料館・国立療養所多磨全生園（東村山市青葉町4丁目）

国立ハンセン病資料館は、国が、ハンセン病及びハンセン病対策の歴史に関する知識を普及啓発し、もって偏見・差別の解消及び患者・元患者の名誉回復を図ることを目的とした施設である。前身は、1993年（平成5）開館した「高松宮記念ハンセン病資料館」。2007年（平成19）に「国立ハンセン病資料館」

として再開館した。

国立療養所多磨全生園は、ハンセン病患者の療養施設。1909年（明治42）、公立療養所第一区全生^{ぜんせい}病院^{びょういん}として設立され、1941年（昭和16）、国に移管され、国立療養所多磨全生園^{ぜんしょうえん}として発足した。

「えどはくカルチャー」では、国立ハンセン病資料館の学芸員、黒尾和久氏に、国立ハンセン病資料館の常設展および国立療養所多磨全生園の園内をご案内していただいた。園内では、主に、納骨堂、全生図書館（現・美容室）、築山（望郷の丘）、「土塁・堀」の残存、永代神社などを見学した。築山（望郷の丘）は、北条民雄の「望郷歌」で患者たちに「望郷台」と呼ばれていた築山である。

（3）大岡昇平『武蔵野夫人』の小金井を歩く

多摩文学歴史散歩の第3回目は、大岡昇平の『武蔵野夫人』をとりあげた。『武蔵野夫人』は、1950年（昭和25）に発表された恋愛小説である。フランスの作家スタンダールから学んだ本格的な恋愛心理分析の手法によってベストセラーとなった。舞台となる小金井地域について緻密な地域描写がなされている点が大きな特徴であり、そのことから、多摩文学歴史散歩にこの作品をとりあげた。

「えどはくカルチャー」では2日間の講座として開催した。1日目の講義では、大岡昇平、『武蔵野夫人』、そして、舞台となった小金井地域について説明し、2日目では、実際に小金井市の『武蔵野夫人』ゆかりの地を巡った。

①大岡昇平

大岡昇平^{おおおかしょうへい}（1909（明治42）～1988年（昭和63））は、東京市牛込区新小川町（現：東京都新宿区新小川町）に生まれた小説家。

成城第二中学校在学中に、富永次郎、小林秀雄、中原中也、河上徹太郎など若き文学者たちと出会い、文学的影響を強く受けた。1929年（昭和4）、京都帝国大学文学部に入学し、スタンダールなどのフランス文学を学ぶ。1944年（昭和19）6月、35歳のときに招集され、フィリピンのミンダナオ島の戦地に赴く。翌年、アメリカ軍の捕虜となり、敗戦を迎える。敗戦後は、自身が捕虜になった経験を書いた『俘虜記』（1948年（昭和23））で文壇に登場した。また、敗戦直後の武蔵野を舞台とした『武蔵野夫人』（1950年（昭和25））は、明晰で分析的な文体によって恋愛心理をとらえた小説で、敗戦後の新しい小説を提示した。

大岡昇平の文学は、敗戦後日本の状況を、戦争体験を基にして総合的にとらえようとしたものである。作品は多彩であり、戦争を直接問うものとして、戦場で人肉食の問題をとりあげた『野火』や『レイテ戦記』。『パルムの僧院』の翻訳などのスタンダール研究。中原中也や富永太郎など若き詩人の評伝的研究。同時代の文学や社会を問う評論。さらに、文学者たちとの論争も多くあり、戦後文学を代表する作家の一人である。

②『武蔵野夫人』

小説『武蔵野夫人』は、1950年（昭和25）1月号～9月号の「群像」に連載され、同年11月、大日本

雄弁会講談社より単行本として刊行された。ベストセラーになり、1951年（昭和26）年5月～6月には文学座で「武蔵野夫人」（福田恒存脚色）が公演され、同年9月には、東宝が「武蔵野夫人」（溝口健二監督）として映画化した。

内容は、武蔵野段丘の「はけ」¹⁾に住む人妻、秋山道子と、ビルマから復員してきた従弟の宮地勉との間に芽生えた悲劇的な恋の物語。道子の道徳心から、恋愛関係を発展させることができず、結局、道子は自殺をはかり、勉の名前を呼びつつ死んでゆく。武蔵野を舞台に、敗戦直後の厳しい生活を生きる人々の欲望・虚栄・恋愛など様々な心理模様が描かれ、敗戦後をどう生きるかを誠実に問うた作品。フランスの小説家、スタンダールなどに学んだフランス心理小説の手法を、日本の文学風土のなかで試みた、大岡昇平の初期代表作のひとつである。

（ア）大岡昇平の地形への強い関心 — 「はけ」 —

『武蔵野夫人』は、敗戦後の厳しい状況の日本社会を背景に、そこで展開される男女の恋愛心理を綿密に描写することを禁欲的なまでに守って書かれた小説であるが、舞台となる武蔵野という土地への描写も精緻を極めている。作者の大岡昇平自身も、「武蔵野夫人と地図」（『産業経済新聞』（大阪）第3100号、1951年5月15日）、「実在の「はけ」」（『旅』9月号（第25巻第9号）日本交通公社、1951年9月1日）などにより、この作品を書くに当たり、どのように実際の武蔵野地域についての調査を行ったかを書き残している。

「武蔵野夫人と地図」では、次のように記しており、作品を書くに当たり、実際に地図を参照したことを述べている。

小説の舞台に選んだ土地は、無論実地調査しなければならないが、地上の歩行する我々が、眼で見得る範囲は知れたものであって、付近一帯の地形の概略の呑込んでなければ、眼前の風景がよく理解出来ないものである。逆に地図を見ることによって、逆に人物を動かす経路などを思いつくことなど屢々である。例えば拙作「武蔵野夫人」では、主人公に二度狭山丘陵（村山貯水池）に行かせているが、これは最初小説の舞台の国分寺付近の地図を買ったら、この丘陵が全部含まれていた。その地形に興味を持つことから始めて主人公をそこへ行かせることを思いついた。実際に行ったのは書き始めた後であったが、地図から想像していたのとは少し違っていた。そこでその失望も主人公に与えて主人公の心理の一つの転回の契機とすることが出来たという次第であった。人は知らないが、とにかく僕は、或る地方の小説を書くには、付近の五万分の一地図を拵げないと筆が取れない。

また、「実在の「はけ」」では、作品中に出てくる「はけ」が、「省線武蔵境と小金井駅の中間の線路の南側」にあることや、登場人物の家の実際の位置などを紹介している。そして、岩手県に住む読者からの手紙を紹介し、「はけ」という名称の語源がアイヌ語のPake「頭」からきたのではないかという説を縷々書き記し、大岡昇平の土地への執着がわかる。

大岡昇平の戦争体験から生まれた小説『野火』や『レイテ戦記』などにも、詳細な地形の描写はある。地形の描写なくしては、戦闘状況に関する作品は成立しないからだが、『武蔵野夫人』においても地形

についての詳細な描写が現れている。

このように地形への描写が詳細な作品は、文学歴史散歩にとってはうってつけともいえ、「えどはくカルチャー」では地形の綿密な描写をよく示す『武蔵野夫人』の冒頭部分を紹介した。²⁾ 地図をみながらでないとなかなか理解できない程、緻密な描写である。

（イ）大岡昇平と富永家 一道子の家

この作品の舞台や登場人物には、大岡昇平が戦争から帰還後に寄寓した富永家が大きく関わっている。富永家とは、大岡昇平が、成城第二中学校在学中に知り合った富永次郎（1909～1969）の家（東京都小金井市中町）である。大岡昇平は、敗戦後、捕虜になっていたフィリピンのレイテ島を出航し、1945年（昭和20）12月、博多港に入港、家族の疎開先の兵庫県明石郡大久保町大窪521番地に着いた。そして、1948年（昭和23）1月、家族と共に上京し、東京都北多摩郡小金井町399番地（現：小金井市中町1丁目13番）の富永次郎宅に寄寓する。この年の11月には神奈川県鎌倉雪ノ下39番地（現：神奈川県鎌倉市雪ノ下1丁目13番13号）の小林秀雄宅の離れに転居するが、この短い間の富永家での経験が、『武蔵野夫人』の舞台や登場人物のヒントを与えたのである。

大岡昇平の書いた前掲の文章「実在の「はけ」」には、次のように記されている。

「はけ」は省線武蔵塚と小金井駅の間線の南側にあります。小金井駅から行けば、多磨墓地へ向う広い道路が、坂の降り口で十字に交叉する道を左へ取り、小金井第一小学校を過ぎ、火見櫓のところから右へ斜面を降りると、そこが「はけ」です。樹がよく繁り、水が湧いているのも、小説にある通りです。僕は昭和二十三年疎開先から上京した時、ここの小説中では大野の家に当たる場所にある友人富永次郎のところに、半年ばかり厄介になっていたことがありました。その間に附近を歩き廻って得た見分を集めて、あの小説の舞台を作ったのです。人物の性格も、例えば宮地老人など富永の死んだ父君の倅をかりていますが、事件そのものは富永家とは何の関係もありません。道子の家は現在中村研一画伯のお宅の位置です。水が湧き、笥にして使っておられるのも事実ですが、事件が中村家と何の関係もないことは富永家と同じです。水は「下道」に流れ出し、セメントで小さな溜り場を作ってあり、近所の方が洗濯などします。「出水」と呼ばれているそうです。ここには小説に書いた通り「野川」と呼ばれる小川の流域に面し、遠く多磨墓地の松林、多磨丘陵、丹沢山塊から富士も見えます。ひろい武蔵野の原とはちょっとかわった、こぢんまりとまとまった風景です。冬、斜面の上には強い寒風が吹いている時でも、坂を降りてしまうと、嘘のように風がなく暖かい別天地です。（下線は行吉記す。）

「はけ」や野川、また、登場人物の家々も実際的小金井市がモデルとなっていることがわかる。主人公の秋山道子の家は、画家中村研一の家がモデルであり（現在は、小金井市の「はけの森美術館」（東京都小金井市中町1-11-3）となっている。）、また、大野という道子のいとこの家は、寄寓していた富永次郎の家をモデルとしていることがわかる。登場人物も、宮地信三郎（秋山道子の父親）は富永次郎の父親がモデルであり、「実在の「はけ」」には記されていないが、秋山道子は、富永次郎の姉、富永ゆり子がモデルと言われている。

「えどはくカルチャー」では、『武蔵野夫人』から、「第1章「はけ」の人々」の、宮地信三郎が小金井に土地を買った経緯の個所と、道子が長兄・次兄（宮地慶次）を崇拜していた個所を紹介した。³⁾ それらは、実際の富永家のことに変更を加えながら書いている個所で、小説の細部においても富永家のおもかげが記されていることがわかる。

大岡昇平は、富永家とは、青年時代からの長い付き合いがある。大岡昇平は、16歳の頃、成城第二中学校で富永次郎と出会う。次郎を通じて、当時すでに亡くなっていた次郎の兄、富永太郎を知る。太郎は詩人であったが、その才能に大岡は魅かれ、生涯、富永太郎について伝記や評論を書いている。（たとえば、『富永太郎 書簡を通して見た生涯と作品』中央公論社1974年（昭和49）9月30日。）大岡昇平は、生涯、富永次郎や次郎の両親など、富永家の人々と交友を持ち、富永家は大岡昇平の文学活動にとって重要であった。「えどはくカルチャー」では、富永太郎の詩「画家の午後」を紹介したが、ここでは割愛する。

(ウ) 『武蔵野夫人』の文学的鑑賞（スタンダールと夏目漱石の影響、道子の勉への思い）

「えどはくカルチャー」では、『武蔵野夫人』の文学的な鑑賞も行った。『武蔵野夫人』へのスタンダールや夏目漱石の影響、また、主人公、秋山道子の宮地勉への恋愛感情について説明した。

まず、『武蔵野夫人』へのスタンダールの影響についてであるが、大岡昇平は、大学時代からフランスの小説家スタンダール（Stendhal 1783～1842）に魅かれ、スタンダリアン（スタンダールに関する深い知識や愛着を持っている人）として名を知られていた。スタンダールは、フランスの小説家で、社会批判と心理描写にすぐれ、フランス近代リアリズムの先駆者とされる小説家である。大岡昇平は、その明晰で知的な心理描写の手法を学び、それを使って『武蔵野夫人』の登場人物の様々な心理を追求している。「えどはくカルチャー」では、スタンダールの『パルムの僧院』（La Chartreuse de Parme, 1839）と『赤と黒』（Le Rouge et le Noir, 1830）の一節と、それぞれに対応する『武蔵野夫人』の一節を紹介した。⁴⁾ 『パルムの僧院』は、ミラノの青年ファブリスと叔母のサンセヴェリーナ公爵夫人、そして、監獄長官の娘クレリヤとの恋愛を描いた物語で、大岡昇平は、『パルムの僧院』を1948年（昭和23）に翻訳している。また、『赤と黒』は、野心的な青年ジュリアン・ソレルとレナール夫人（家庭教師先の夫人）、そして、マチルド（侯爵令嬢）との恋愛を描いた物語である。

なお、『武蔵野夫人』におけるスタンダールの『パルムの僧院』、『赤と黒』の影響については、野田康文『大岡昇平の創作方法－『俘虜記』『野火』『武蔵野夫人』』（笠間書院 2006年）に詳しい。

次いで、『武蔵野夫人』には夏目漱石の小説『行人』の影響があることを説明した。『行人』は、大学教授の長野一郎の自我の苦悩を描いた作品で、長野一郎は妻の直を信じ切れず、一郎の弟の二郎に、直の貞節を試すよう執拗に依頼する。二郎は、抗しきれず、直と日帰りして和歌山に行き、彼女の本意を聞いてみることにするが、台風の影響により帰れなくなり、直と一夜を旅館で過ごすことになる。むろん、二人の間に何も起こらないのであるが、妻の貞節を弟に試すよう依頼するという異常な言動が、主人公、一郎の苦悩をよく表している。『武蔵野夫人』では、勉と道子が、村山貯水池にでかけ、キャサリン台風により帰ることができなくなり、ホテルに泊まることになる。結局、愛し合っているこの二人は、肉体的結びつきには至らず、そのことがかえって二人の愛情の深さを示すことになる。

大岡昇平は、夏目漱石についての評論集『小説家 夏目漱石』（筑摩書房 1988年）を著しており、夏目漱石の作品は良く読み込んでいる。『武蔵野夫人』の勉と道子が村山貯水池に行く場面は、漱石の『行人』の、二郎と直との和歌山でのエピソードを下敷にしていることが想定される。⁵⁾

最後に、道子の勉への愛情について説明を行った。⁶⁾ 道子も勉を愛しているが、道子は自分が結婚しているため勉を拒み続け、勉は、富子という道子のいとこの妻と関係をもってしまう。しかし、道子の勉への愛情は変わらず、最後に、勉へ財産を遺し、自殺するという形で、勉への愛情を表現する。悲劇に終わる道子の愛情であるが、激動の敗戦期も、道徳を守って生きた女性を描いた『武蔵野夫人』は、普遍的な恋愛のテーマを、日本の敗戦期を背景に、都心から離れた小金井のハケのある場所を舞台に描いた、優れた東京の小説ということが出来る。

③物語の舞台を訪ねて

本作に登場する代表的な風景として、国分寺崖線（はげ）が挙げられる。国分寺崖線は、古多摩川が武蔵野台地を浸食する過程で造られた河岸段丘の一つ、武蔵野段丘の崖であり、その長さは東京都立川市から大田区までの約30キロメートルに及ぶ。作品の舞台である現在の東京都小金井市（以下「小金井市」）における崖の高さは15～20mにもなり、崖の上下は勾配のある坂で繋がっている。現在、崖の上には玉川上水やJ R武蔵小金井駅があり、崖の下には野川のかわが東流する。



野川から国分寺崖線を臨む



崖線の上下を結ぶ階段（ムジナ坂）

小金井の地は、元文2年（1737）に川崎平右衛門が玉川上水沿いに植えた桜並木により、花見の名所として人々の関心を集め、多くの文章や絵画などに記録され、江戸からの道筋を示した刷物も作られた。

1889年（明治22）4月11日には甲武鉄道が開通、同時に境駅（1919年（大正8）に武蔵境駅と改称）と国分寺駅が開業し、小金井の桜見への最寄駅となった。1924年（大正13）4月、花見客の運送を目的として小金井村に臨時停車場が設置されたが、同月13日の日曜日には降車客26,555人、乗車客29,319人を記録しており、2年後の1926年（大正15）に武蔵小金井駅が開業した。駅の開業による地域の変化は、本作でも下記のとおり語られる。

三十年前湧水を含む窪地一帯の約千坪の地所は、ほとんどただのような値段で東京の官吏宮地信三郎の手に移った。^{みちぼた}道傍の水溜りにおける水の使用と、現在の「はけ」の地所に新しい井戸を掘る費用の負担とは、長作の先代が譲渡に際してきわどくつけた条件であったが、それでも先代は死ぬまで損をした損をしたとこぼしていた。というのは土地を手離して五年経つと、ここから徒歩十五分のところに小金井駅ができ、地価が三倍になったからである。

鉄道省事務次官の宮地は無論駅の新設をあらかじめ知っていた。しかし、彼がここを選んだのはあながち打算のためばかりではない。彼は実際「はけ」が気に入ったのである。水があり日溜りになっているところも気に入ったが、何よりも気に入ったのは富士が見えることであった。

一行目に登場する宮地信三郎は、本作のヒロイン秋山道子の父親である。なお文中に「小金井駅」とあるのが武蔵小金井駅である。武蔵小金井駅に先立つ1893年（明治26）に東北本線小金井駅が開業しているため、武蔵小金井駅をはじめ、小金井の地に開業した駅にはほかにも「新」（西武線新小金井駅：1917年（大正6）、「花」（西武線花小金井駅：1927年（昭和2）、「東」（JR東小金井駅：1964年（昭和39））の言葉を冠している。

武蔵小金井駅の開業は、当地と東京の中心部とのアクセスを容易にし、多くの人々に居住地としての選択を提供、住宅地が形成された。一方、駅から徒歩15分程の「湧水を含む窪地一帯の約千坪の地所」は、国分寺崖線による急勾配の坂のためでもあろうか、開発の波が押し寄せ過ぎる事もなく、おそらく水と緑が豊富に残された場所だったのだろう。

「新編武蔵風土記稿」（文政11年）⁷⁾では、「小金井」、及び本作にて道子と勉が訪れた神社がある「貫井」の名は、この地の湧水に由来すると伝える。

「上小金井村（中略）陸田多くして水田少し、土性野土、村内平地にして北の方に少しの丘岡あり、（中略）村名の起り詳ならず、土人の話には清水寺の東邊にわづかに出る泉あり、これを小金井といへり、是村名の由て起る所なりと、此邊温井〔今貫井〕村などいふて井を以て村名に呼るもの、皆井戸少き地にて澗水、或は多磨川上水を斟で朝夕の餐用に給せり、たまたま井ある所によりてかくよべりと云、（中略）

水利 用水〔多磨川上水を以て灌漑とせり、村の北貫井新田地よりわかれて上下の二村に注ぐ、又國分寺村より出る清泉、貫井村の清泉と混じて、一條の渠溝をなし、貫井村境より来り、村内をへて下小金井村に入、]

「貫井村 貫井村は、國分寺村の東隣なり、或は温井に作る、郷庄の唱を失ひたり、東は上小金井村に接し、南は府中宿に及び、西は國分寺村、北は當村の新田なり、東西凡十町程、南北十二町、土性は黒野土、水田少く陸田多し、（中略）

山川 堀川〔村内東の方丘陵の下より清水所々湧出せり、村内井少ければ、此清水を斟て朝夕の煮炊に供す、其水國分寺に注ぎ、其村より出る清水に合して一渠をなし、再び當村に入、これを堀川といふ、廣さ纔に一間、流末小金井村に入、又此水を澈め水碓に灌く、水碓二ヶ所あり、一は村民友八の持、一

は新田の百姓三郎右衛門の持なり、]

上記の貫井村は現在の小金井市貫井南町、貫井北町、及び前原町の一部に該当する。文中の「堀川」の説明における「清水所々湧出せり」東の方の丘陵は国分寺崖線であろう。崖線の湧水が人々の生活に不可欠な存在であったことが分かる。また湧水が国分寺村より出る清水と合流して成す「一渠」は、現在の野川である。物語の最初には、野川の成立について下記のとおり詳細に記される。

中央線国分寺駅と小金井駅の間、線路から平坦な畠中の道を二丁南へ行くと、道は突然下りとなる。「野川」と呼ばれる一つの小川の流域がそこに開けているが、流れの細い割に斜面の高いのは、これがかつて古い地質時代に関東山地から流出して、北は入間川、荒川、東は東京湾、南は現在の多摩川で限られた広い武蔵野台地を沈殿させた古代多摩川が、次第に西南に移って行った跡で、斜面はその途中作った最も古い段丘の一つだからである。

狭い水田を発達させた野川の対岸はまたゆるやかに高まって楯状の台地となり、松や桑や工場を乗せて府中まで来ると、第二の段丘となって現在の多摩川の流域に下りている。

野川はつまり古代多摩川が武蔵野におき離れた数多い名残川の一つである。段丘は三鷹、深大寺、調布を経て喜多見の上で多摩の流域に出、それから下は直接神奈川の多摩丘陵と対しつづ婉々六郷に到っている。



現在の野川（貫井神社付近）

多摩川のかつての流路の一つである野川は、国分寺崖線の湧水を集めるためか、川幅に対して豊かな水量が、飢えと渇きが極限に達していた南方戦線から復員した勉を惹き付ける。野川の水源を辿る行程は、勉と道子との最初の道行きとなった。

その途中にある貫井神社は、現在でも崖線の湧水を見ることができる。天正18年（1590）の創建と伝えられ、境内には湧水による池があり、弁財天が祀られている。「新編武蔵風土記稿」にも同様の記述が見られる。

「神社 辨天社 社地除、八畝十歩、村の北にあり、其地に廣さ二畝許の池あり、其孤嶼に安す、本社二間に一間半、拝殿三間に二間、前に木の鳥居を建、神體木の坐像長三寸許、弘法大師作と云、」

1869年（明治2）には巖島神社と改称、翌年には貫井神社となり、現在は市杵島姫命を主祭神としている。市杵島姫命は水と芸能を司る女神であり、仏教においては弁才天を指す。なお、明治2年の「巖

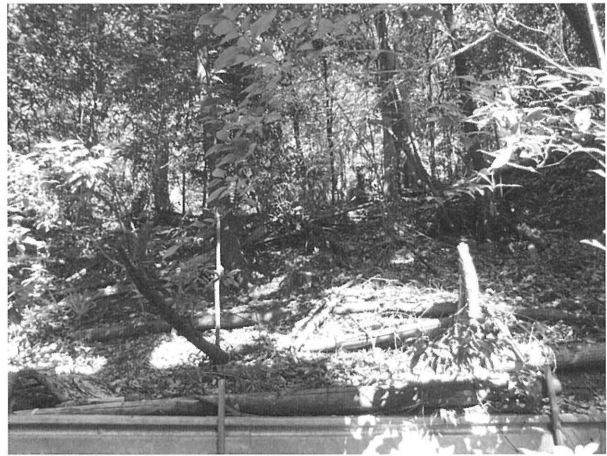
島」という神社の名称も、もとは市杵島姫の読み「いちきしま」が「いつくしま」に転じたことによる。神社を訪れた勉と道子は、石段に沿って流れ落ちる水の源を探して、境内を探索する。

水の源を訪ねて神社の奥まで進んだ。流れは崖に馬蹄形に囲まれた拝殿の裏までたどれた。そこは「はけ」の湧泉と同じく、草の生えた崖の黒土が敷地の平面と交わることから、一面に水が這い出るように湧いて、拝殿の縁の下まで拡がり、両側の低い崖に沿って、自然に溝を作って流れ落ちていた。

現在でも神社を囲むように高い崖があり、その下部に湧水を見ることができる。なお、同神社近辺の湧水は、江戸時代には生活用水として使われ、1923年（大正12）には青少年の体育向上と精神鍛錬を目的とした貫井プールが造成され、1975年（昭和50）まで使われた。現在、貫井神社の入口に建つ記念碑が、プール設立の経緯と在りし日の姿を伝えている。



貫井神社の池



同神社を囲む崖



(上) 崖下に見られる湧水 (右) 貫井プールの碑



貫井神社を後にした勉と道子は、野川の水源を求めてさらに歩を進め、一つの池に辿りつく。土地の百姓にぶっきらぼうに答えられた「恋ヶ窪」という池の名に、勉に恋しながらも、秋山の妻である自分の立場と道徳心から、それを恋と認められない道子は、膝の力を失う程の強い衝撃を受ける。この珍しい名称は、鎌倉時代の武将畠山重忠と、当地の遊女の夙妻太夫との悲恋に由来するという。

二人だけの道行きの終着点には「恋」が存在した。しかしその恋は、女性の自死により悲劇的な結末を迎えていた。「恋ヶ窪」にまつわるこのエピソードは、今後の勉と道子が辿る物語の行く末を暗示しているとも考えられる。

④散歩の行程

講座の2日目では、JR武蔵小金井駅を発着点として、下記の行程により『武蔵野夫人』ゆかりの地の現地散歩を行った。

- a. 幡随院
- b. 西念寺
- c. 金蔵院
- d. 中村研一記念小金井市立はけの森美術館・はけの小路
- e. 富永次郎宅跡
- f. 武蔵野公園・野川

a. 幡随院（ばんずいいん小金井市前原町3-37-1）

神田山幡随院新知恩寺。慶長8年（1603、または慶長15年）に京都知恩寺住持の幡随意が、徳川家康から神田駿河台に賜った土地に新知恩院を創建した。関東十八壇林の一つであったが、江戸時代を通して度々の火災に見舞われ、次第に規模が縮小していった。

1923年（大正12）の関東大震災、1931年（昭和6）の火災により現在地に移転、現在に至る。歌舞伎や浄瑠璃に登場する町奴の頭領「幡随院長兵衛」の名乗りは、同寺の境内の居住や和尚の弟などの説がある。

b. 西念寺（小金井小次郎の墓／小金井市中町4-11-10）

雲龍山西念寺。元和7年（1621）に浜町御坊内に創建、明暦3年（1657）の大火により築地本願寺とともに築地に移転。1923年（大正12）の関東大震災後にて被災し、市内の区画整理により、1928年（昭和3）に現在の地へ移転した。

墓地には山岡鉄舟の筆による小金井小次郎の追悼碑と墓がある。小金井小次郎（文政元年（1818）～明治14年（1881））は名主関勘右衛門の次男として生まれ、長じて新門辰五郎の弟分になった。喧嘩と賭博開帳の罪により安政3年（1856）に三宅島に配流、慶応4年（1868）4月の恩赦までの約13年間を島で過ごした。その間に、慢性的な水不足に苦しむ島民たちに井戸を造成。明治時代に再び島へ渡り、木炭の製造を指導するなど、島の生活向上に力を尽くした。⁸⁾

c. 金蔵院 (小金井市中町4-13-25)

天神山金蔵院観音寺。山号の「天神山」は、かつて菅原道真を祀る天満宮(現:小金井神社)の別当寺であったことに由来か。「新編武蔵風土記稿」⁹⁾には「境内除地、三石三斗八升、下山野にあり、天神山観音寺と號す、新義真言宗、府中妙光院の末、本堂昔年焼失していまだ再建せず、本尊十一面観音、木の坐像長一尺餘、開山詳ならず、中興は阿闍利堯存永禄九年八月一日遷化、稲荷社 小祠、境内にあり」とある。下山野は下小金井村の字名。

1873年(明治6)には、小金井地域の初めての公立学校「尚綱学校」が開かれた(後の小金井第一小学校)。小学校の移転後は1922年(大正11)まで小金井役場が置かれるなど、地域の中心的な役割を果たした。境内の櫻^{けやき}と椋木^{むくのき}は樹齢400年以上を数える市の天然記念物。また白萩が多く、「萩寺」とも言われている。

d. 中村研一記念小金井市立はけの森美術館 (小金井市中町1-11-3)・はけの小路

主人公、秋山道子の家のモデルとなった場所が、現在の中村研一記念小金井市立はけの森美術館である。洋画家、中村研一(1895~1967)が亡くなって22年後の1989年(平成元)に、中村研一記念美術館として開館し、その後、2004年(平成16)、小金井市に寄贈され、2006年(平成18)に、「中村研一記念小金井市立はけの森美術館」としてオープンした。中村研一の作品を紹介し、特別展も開催する美術館である。この美術館の位置が、「はけ」にあることから、館名に「はけの森」という言葉が入っている。美術館には、「はけ」から湧き出ている水(「東京の名湧水57選」にも選ばれている)を利用した庭園もある。中村研一は、空襲で代々木のアトリエを焼失し、後に小金井市に移り住み、終生この地で作品を描き続けた。

また、美術館の庭園の湧水が、せせらぎになって、南側の野川へと流れこんでいるが、そのわきに「はけの小路」という遊歩道が整備されている。



中村研一記念小金井市立はけの森美術館の庭園

e. 富永次郎宅跡 (小金井市中町1丁目13番)

大岡昇平が敗戦後、寄寓したのが、成城学園で同級生だった富永次郎宅。大岡はここに、約10ヵ月寄寓した。この家は、富永次郎の父親が、退職後の住まいとして1925年(大正14)に建てたとされる。「はけ」の斜面に位置しており、家の東側に「ムジナ坂」が通る。『武蔵野夫人』では、主人公、秋山道子のいとこの大野の家として描かれている。『武蔵野夫人』(第一章「はけ」の人々)には、富永次郎の父親がモデルの宮地信三郎がこの土地を手に入れた経緯が描かれている。

f. 武蔵野公園 (小金井市前原町2丁目、東町5丁目、中町1丁目、府中市多磨町2・3丁目)・野川

武蔵野公園は、府中市と小金井市にまたがる都の公園で、公園北部を野川が西から東に流れる。公園の東側は野川公園に接する。

野川は、多摩川水系多摩川支流で、国分寺市に源を発し、武蔵野台地の南端、国分寺崖線に沿って、小金井市、三鷹市、調布市、狛江市を貫流し、世田谷区で多摩川に合流する延長約20kmの一級河川。かつての野川沿いには、田んぼが広がり、「はげ」の湧水や湿地なども多くみられたが、高度経済成長期以降、宅地化が進行し、生活雑排水も流れ込むようになり、環境が悪化していった。しかし、環境整備がなされ、現在は清流が回復されている。

おわりに

以上が、「えどはくカルチャー」で行った講座「多摩文学歴史散歩」全3回の概要である。「はじめに」でも述べたとおり、この講座の特徴は、多摩地域を対象としたこと、また、文学作品の鑑賞をするに際し、その文学作品の背景になった地域の歴史・地理の紹介も行ったことにある。

これらの「多摩文学歴史散歩」では、青梅市、清瀬市・東村山市、小金井市を訪れたが、多摩地域といっても、それぞれの地域には独自の歴史があり、文学作品もその独自性を反映しており、多摩地域の多様性を伝えることができた。

東京都江戸東京博物館は、東京都の博物館として東京都全域を対象とするが、それぞれの地域の独自の特性を紹介し、東京都のもつ多様な魅力を発信してゆく任務があると考えます。

多摩地域を舞台とした文学作品は、この講座でとりあつかった作品以外にも数多くあり、それらの作品に親しみ、かつ、その作品の舞台となった多摩地域についての歴史や地理についても学んでいただきたいと思う。

最後に、つたないながら、私共のこれらの講座に参加していただいた受講者の方々に厚くお礼を申し上げます。

【註】

はじめに

- 1) 本稿では、「多摩」という地域を、東京都のうち、区部（23区）と島嶼地域（伊豆諸島・小笠原諸島）を除いた市町村部とする。
1. 多摩文学歴史散歩について
 - 1) 「東京都江戸東京博物館紀要 第1号」（東京都江戸東京博物館、2011年）「文学散歩という方法 - 漱石文学散歩の記録（行吉正一、田中実穂）」参照
2. 多摩文学歴史散歩の記録
 - (1) 小泉八雲の「雪おんな」の青梅を歩く
 - 1) 富久町には、旧居跡の石碑が建っている（東京都新宿区富久町7-30 成女学園中庭）。また、大久保には、終焉の地の石碑が建っている（東京都新宿区大久保1丁目・大久保小学校脇）。さらに、終焉の地の近くに、新宿区と八雲生誕の町、ギリシャ・レフカダ町との友好都市提携を記念し開園した小泉八雲記念公園（東京都新宿区大久保1丁目7）がある。
 - 2) 「えどはくカルチャー」では、「日本人の微笑」の次の部分を紹介した。「が、すくなくとも、西洋流の方法にした

がって、高度の教養を身につければつけるほど、日本人は心理的にますます、われわれから離れて行く。」から「幸いに、もっとも貧しい人たちのあいだでさえ、政府の教育方針は驚くほどの熱意をもって支持されている。」まで。

3) 平井呈一訳『全訳 小泉八雲作品集 第10巻』(恒文社、1964年)による。原文は以下の通り。

One queer tale, "Yuki-Onna," was told me by a farmer of Chofu, Nishitama-gori, in Musashi province, as a legend of his native village. Whether it has ever been written in Japanese I do not know; but the extraordinary belief which it records used certainly to exist in most parts of Japan, and in many curious forms...

4)、5) 昭和レトロ商品博物館編著『雪おんな』クレイン、2002年

6) 「えどはくカルチャー」では、『青梅の雪おんな』(小川秋子(青梅雪おんな探偵団)編、昭和レトロ商品博物館、2006年)から、「河辺の渡しに出た雪女郎」と「川を渡る雪女」を紹介した。

7) 『大日本地誌体系12 新編武蔵風土記稿 第六巻』P.109 雄山閣、1970年。

8) 『定本 青梅市史』青梅市史編さん実行委員会、1966年。

9) 『仁君開村記 柚保志 青梅市史史料集 第47号』P.55-58 青梅市郷土博物館、2000年

10) 『大日本地誌体系12 新編武蔵風土記稿 第六巻』P.185 雄山閣、1970年

11) 十方庵敬順 著・朝倉治彦 編訂『遊歴雑記初編』P.309-310 平凡社、1989年

12) 青梅市立郷土博物館『青梅宿の文芸活動 -小林天淵を中心に-』2001年

13) 『定本 青梅市史』青梅市史編さん実行委員会、1966年

(2) 療養所の町と文学 -東京療養所・清瀬病院、多磨全生園-

1) 高三啓輔『サナトリウム残影 結核の百年と日本人』日本評論社、2004年

2) 癩予防ニ関する件(明治40年法律第11号)「第四条 主務大臣ハ二以上ノ道府県ヲ指定シ其ノ道府県内ニ於ケル前条ノ患者ヲ収容スル為必要ナル療養所ノ設置ヲ命スルコトヲ得 2 前項療養所ノ設置及管理ニ関シ必要ナル事項ハ主務大臣之ヲ定ム 3 主務大臣ハ私立ノ療養所ヲ以テ第一項ノ療養所ニ代用セシムルコトヲ得」

3) 国立ハンセン病資料館の設立は、以下の法令に基づいている。「ハンセン病問題の早期かつ全面的解決に向けての内閣総理大臣談話」、「ハンセン病療養所入所者等に対する補償金の支給等に関する法律」前文および第1条(趣旨)、第11条(名誉の回復等)、「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」第18条(名誉の回復及び死没者の追悼)。

4) 『日本わらべ歌全集 22 徳島高知のわらべ歌』(柳原書店、1981年)には、「寝させ唄、作品名:つくつく法師、採集地:高知県高岡郡佐川町、採譜:吉良長幸」とある。

5) 『北条民雄一いのちの火影』(光岡良著 沖積舎、1981年)

6) 『大日本地誌体系12 新編武蔵風土記稿 第六巻』P.278・281～283 雄山閣、1970年

7) 日本医師会「地域医療情報システム」のうち東京都清瀬市

<http://jmap.jp/cities/detail/city/13221> (閲覧日:2017年10月17日)

2016年(平成28)10月における清瀬市内の病院病床数は全国平均値の約2.3倍であり、療養病床数は3.5倍、結核・感染病床数に至っては55倍にもなる。1931年(昭和6)の東京清瀬病院設立に始まる結核治療の歴史と実績が表れていると言えよう。

8) 清瀬市 市史編さん草紙「市史で候」(平成26年8～9月)「病院街の歴史紹介」

<https://www.city.kiyose.lg.jp/s009/020/010/011/20140815165514.html> (閲覧日:2017年10月17日)

9) 『清瀬市史』清瀬市史編纂委員会、1973年

(3) 大岡昇平『武蔵野夫人』の小金井を歩く

1) 「はげ」は、崖地、丘陵、山地の片崖を指す地形の名前。『武蔵野夫人』の舞台となっている小金井地域には、国分寺崖線という崖の連なりがほぼ東西に通っており、その崖の連りの南側が「はげ」と呼ばれている。「野川」は、その国分寺崖線という崖の連りの下に湧き出る湧水を集めて流れている川。

2) 冒頭部分は以下の通り。「中央線国分寺駅と小金井駅の間、線路から平坦な畠中の道を二丁南へ行くと、道は突然下りとなる。「野川」と呼ばれる一つの小川の流域がそこに開けているが、流れの細い割に斜面の高いのは、これがかつて地質時代に関東山地から流出して、北は入間川、荒川、東は東京湾、南は現在の多摩川で限られた広い武蔵野台地を沈殿させた古代多摩川が、次第に南に移って行った跡で、斜面はその途中作った最も古い段丘の一つだからである。狭い水田を発達させた野川の対岸はまたゆるやかに高まって楕状の台地となり、松や桑や工場を乗せて府中まで来ると、第二の段丘となって現在の多摩川流域に下りてくる。野川はつまり古代多摩川が武蔵野におき

忘れた数多い延長川、所謂「名残川」の一つである。段丘は三鷹、深大寺、調布を経て喜多見の上で多摩の流域に出、それから下は直接神奈川の多摩丘陵と対しつゝ蜿蜿六郷に到っている。」

（『大岡昇平全集3』筑摩書房、1994年11月20日）

3) 宮地信三郎が小金井に土地を買った経緯としては、「第1章「はげ」の人々」の「三十年前湧水を含む窪地一帯の約千坪の地所は、ほとんどただのような値段で東京の官吏宮地信三郎の手に移った。」から「水があり日溜りになっているところも気に入ったが、何よりも気に入ったのは富士が見えることであった。」までを紹介した。また、道子が長兄・次兄（宮地慶次）を崇拜していた個所としては、同じく第1章の「彼女はそのかわり早くから八歳年上の長兄の俊一に熱中した。」から「その兄もやがて長兄と同じ二十四歳の若さで、恐らく長兄から感染した肺結核で死んで行った。」までを紹介した。

4) 『パルムの僧院』（第18章）には次のような描写がある。「こうして、かなり小さな檻の中に押しこめられていながら、ファブリスは大変忙しい生活を送っていた。その全部は、彼女（クレリア - 行吉注）は自分を愛しているか、という非常に重大な問題の解決に費やされていた。絶えず繰り返され、また絶えず疑われた無数の観察の結果は、意識してする態度は否とっているが、眼の動きにある無意識なものは、自分に好意を持っていることを告白しているようだ、ということであった。」（大岡昇平訳）。この部分に対応する個所として、『武蔵野夫人』（第6章 真夏の夜の夢）の次の個所を紹介した。「彼は道子の眼差の意味をたずねて楽しんだ。眼はたしかに「あなたを愛しています」といっていた。しかし同時に「私を不幸にしないで下さい」とも。それはつまり「今の平安から引っ張り出さないでください」ということである。彼の若い恋から見てこの二つの望みは矛盾していたが、彼女の幸福にそれが必要ならば、忍耐しなければならない。」

また、『赤と黒』（第1部第9章）には次のような描写がある。「ついに、十時の鐘の最後の一打ちがまだ鳴っているうちに、ジュリアンはつと手を伸ばし、レナール夫人の手をとった。夫人はすぐ手をひっこめた。ジュリアンは、自分が何をしているのかもよくわからぬまま、もう一度その手をつかんだ。（中略）震える手に力をこめてその手を握りしめた。振りほどこうと最後の努力があったが、結局その手は彼に残った。」（大岡昇平訳）。この部分に対応する個所として、『武蔵野夫人』（第7章 湖の涯）の次の個所を紹介した。「「あたし、こないだの晩も、あなたと富子さん、変なんで、とても心配なのよ。前はそんなことなかったのに。それ、あたしのせいじゃないかと思うと、夜ねられない時があるの」これは勉が道子から聞く最初の愛を含んだ言葉であった。彼は涙ぐんだ。二人は互いに眼を見て、暫く黙っていた。「僕の気持は道ちゃんは知っているはずだ。それにそんなことを思うなんてひどい。あんな人と何かするはずないじゃないか」道子は吐息した。「どうして道ちゃんはそう僕から逃げるんだろう」といって、勉は道子の手を取った。手は震えて引かれようとしたが、到頭そのまま残った。道子はそれを拒まねばならぬと思ったが、結局富子と同じことまではしたいという願いに抗い切れなかった。勉は道子を抱こうとしたが、彼女の怯えた眼が彼を挫いた。握った手にやたらに力を入れることだけが彼の唯一の自由であった。彼はこれまで何度も心に繰り返したいことをいってしまわずにいらなかった。「僕達一緒に成れないかしら」「何をいつてるの」道子は微笑んだ。「あたしこんなお婆さんだし、第一……」秋山の妻ですもの、という言葉はしかし口の中に残った。それを今いうのは、勉にも自分にもあまり可哀そうに思えたからである。秋山との生活の少しも喜びのない細目が思い出された。涙が出て来た。」

5) 「えどはくカルチャー」では、『行人』、『武蔵野夫人』の次の場面を紹介した。まず、夏目漱石の『行人』（「兄」33）では、一郎の弟二郎と、一郎の妻、直が、台風の襲来により一夜を旅館で過ごす場面。「[姉さんどうします]「どうしますって、妾女だからどうして好いか解らないわ。もしあなたが帰るとおっしゃれば、どんな危険があつたって、妾いっしょに行くわ」「行くのは構わないが、——困ったな。じゃ今夜は仕方がないからここへ泊るとしますか」「あなたが御泊りになれば妾も泊るよりほかに仕方がないわ。女一人でこの暗いのにとても和歌の浦まで行く訳には行かないから」下女は今まで勘違をしていたと云わぬばかりの眼遣をして二人を見較べた。「おい電話はどうしても通じないんだね」と自分はまた念のため聞いて見た。「通じません」自分は電話口へ出て直接に試みて見る勇氣もなかった。「じゃしょうがない泊ることにきめましょう」と今度は嫂に向った。「ええ」彼女の返事はいつもの通り簡単でそうして落ちついてた。「町の中なら俥が通うんだね」と自分はまた下女に向った。」次に、『武蔵野夫人』（第八章 狭山）の、勉と道子が、村山野水池のホテルに泊まることになる場面。「二人は肌まで濡れながらひたすら急いだ。まだあるのかとがっかりさせる曲角をいくつか曲って、漸く目的のホテルの見えるところまで来た。湖岸まで芝生を控えたホテルは荒れ果てていた。薄暗いロビーには大衆食堂のような安っぽい卓子と椅子が並んでいるだけ

であった。すべてが埃臭く、そして湿気ていた。二人はそこで颱風が急に進路を変えて小田原へ上陸し、今正にこの狭山丘陵へ向って進んでいること、彼等の乗るべき多摩湖線は配電線の故障で不通となったことを知った。しかし何も考える暇はなかった。二人はとにかく濡れた着物を脱ぎ、粗末な格子縞の浴衣に着替えて、風呂へ入るまでは人心地がつかなかった。二人が通された室は大きなダブル・ベッドがただ一つの装飾であるような種類の室であった。あとは形ばかり粗末な椅子が二つ置いてあるだけである。その椅子に向い合って道子は初めて事態が重大になったのを感じた。茶屋での懸念は本当になった。心に「どうしよう、どうしよう」と呟き続けたが、とにかく二人がここへ泊らねばならぬのは明瞭であった。彼女は自分と勉との間には、いつかこういう大変なことが起ると予感していたような気がした。」

- 6) 「えどはくカルチャー」では、道子と勉の愛情を示す部分二か所を紹介した。まず、第十一章「カメラの真実」の道子と勉が道徳と恋愛について語り合う部分。(「何度もわかったことをもう一度わからねばならないですね。あなたは僕を愛していない」から「あたし達、ほんとに愛し合って、変わらないことが誓えば、そして誓いをいつまでも守ることが出来れば、世間の掟の方で改って、あたし達自分を責めないで一緒になる時が来ると思うの」まで)。次に第十四章「心」の道子が死ぬ間際に、勉への愛情を無意識の内に語る部分。(「明方に近く、人間の声が道子の口から出た。泣く声であった。」から「「トムちゃん、トムちゃん」と道子は大声で繰り返し呼び、両手を上げた。」まで)。
- 7) 上小金井村は『大日本地誌体系11 新編武蔵風土記稿 第五巻』P.1～2、貫井村は『大日本地誌体系10 新編武蔵風土記稿 第四巻』P.362 (いずれも雄山閣、1970年)による。
- 8) 三宅島観光協会 <http://www.miyakejima.gr.jp/see/well-koganeikojiro/> (閲覧日：平成29年11月15日)
- 9) 『大日本地誌体系11 新編武蔵風土記稿 第五巻』P.2、雄山閣、1970年

【主要参考文献】

1. 小泉八雲の「雪おんな」の青梅を歩く

- ・『小泉八雲作品集』(全12巻) 恒文社、1964-1967年
- ・昭和レトロ商品博物館編著『雪おんな』クレイン、2002年
- ・小川秋子(青梅雪おんな探偵団)編『青梅の雪おんな』昭和レトロ商品博物館、2006年

2. 療養所の町と文学ー東京療養所・清瀬病院、多磨全生園ー

- ・『石田波郷全集』(全10巻・別巻1) 富士見書房、1987-1988年
- ・『吉行淳之介全集』(全17巻・別巻3巻) 講談社、1983-1985年
- ・『定本北条民雄全集』(全2巻) 東京創元社、1980年
- ・高三啓輔『サナトリウム残影 結核の百年と日本人』日本評論社、2004年
- ・国立ハンセン病資料館編『国立ハンセン病資料館 常設展示図録2009』2010年

3. 大岡昇平『武蔵野夫人』の小金井を歩く

- ・『大岡昇平全集』(全23巻別巻1) 筑摩書房、1994-1996年
- ・野田康文『大岡昇平の創作方法ー『俘虜記』『野火』『武蔵野夫人』』笠間書院、2006年

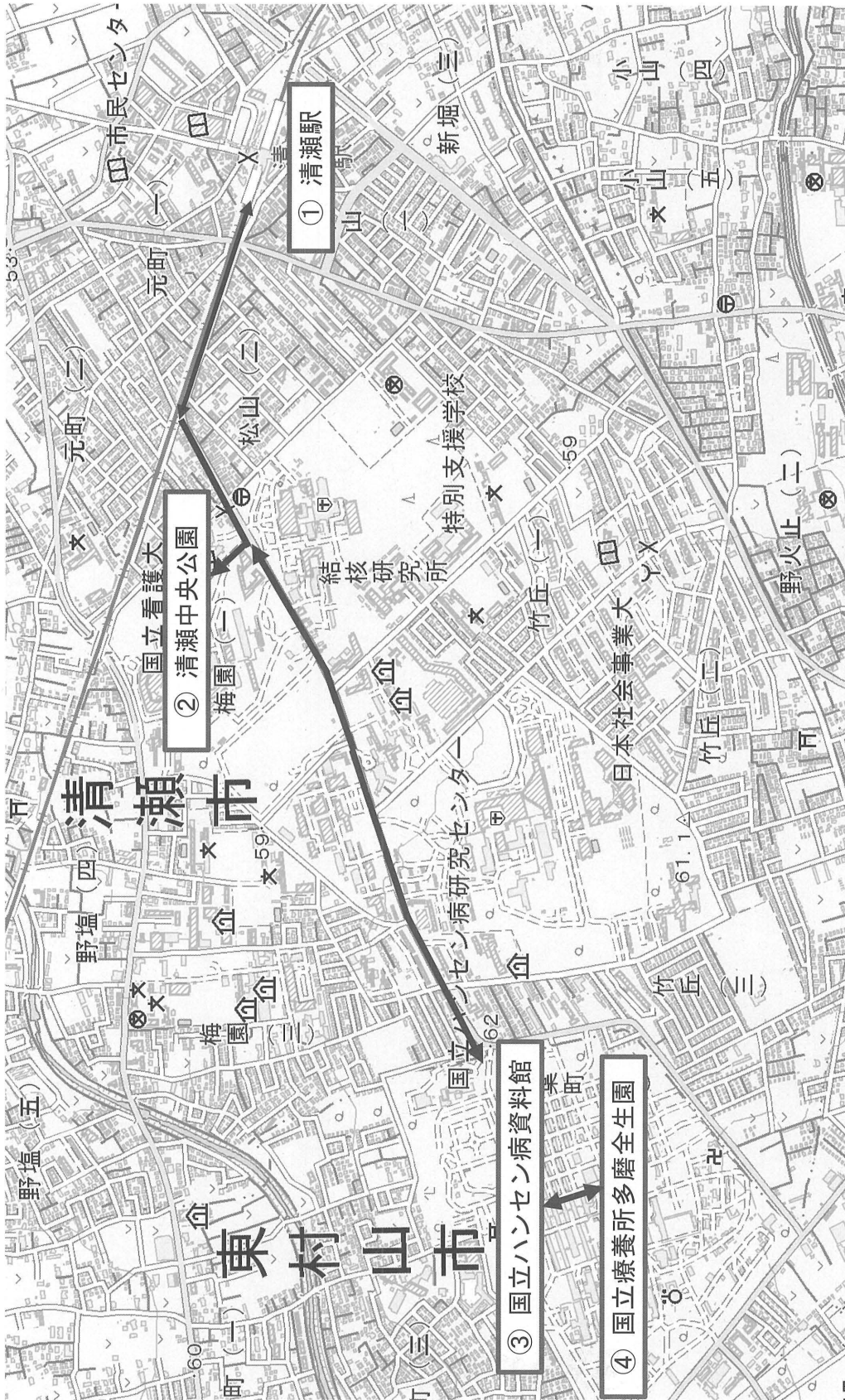
4. 多磨の文学関係資料

- ・滝井孝作編『文学に見る日本の川 多磨川』日本週報社、1960年
- ・横山吉男『東京都下(三多磨)における文学遺跡の研究』横山吉男、1975年
- ・横山吉男『多磨の文学碑 百三十碑余の詳細解説』武蔵野郷土史刊行会、1981年
- ・大河内昭爾『多磨文学散歩』未来工房、1981年

- ・佐々木和子『多摩の文学散歩』けやき出版、1993年
- ・横山吉男『多摩文学散歩 文学碑・墓碑を歩く』有峰書店新社、1996年
- ・山本貴夫『多摩文学紀行』たましん地域文化財団、1997年
- ・青木登『名作と歩く多摩・武蔵野文学散歩』のんぶる舎、1999年



【地図3】多摩文学歴史散歩第1回 小泉八雲の「雪おんな」の青梅を歩く 散歩の行程



多摩文学歴史散歩 第2回 療養所の町と文学

2011年11月8日（火）13:00~16:30

国土地理院発行2万5千分の地図より作成

【地図4】多摩文学歴史散歩第2回 療養所の町と文学 — 東京療養所・清瀬病院、多磨全生園 — 散歩の行程



多摩文学歴史散歩 第3回 大岡昇平『武蔵野夫人』の小金井を歩く
 2014年2月28日(金) 13:00~16:30

国土地理院発行
 2万5千分の地図より作成

【地図5】多摩文学歴史散歩第3回 大岡昇平『武蔵野夫人』の小金井を歩く 散歩の行程